

作
..
永瀬
巧真

「朧月」・登場人物

- 岡本 幸生 某連続殺人事件の犯人。肺の病を患っている
- 岡本 ちえ 幸生の祖母。女手一つで幸生と百合絵を育て上げる
- 難波 藤代 幸生の幼馴染。かつて幸生と東京へ行く約束をしていた
- 三宅 蓮子 村の男と情事をしながら退廃的な毎日を過ごす
- 三宅 慎一 蓮子の夫。蓮子に対して慢性的な暴力をあげてしまう
- 藤原 努 村の外れにある苦尾周辺を管轄とする駐在所に勤務
- 山下 康二 村の若長。村の掟を守り、この村の秩序を重んじる
- 軍医 日本帝国陸軍「軍医」の男。徴兵検査のため苦尾集落へ赴く
- 男一 戦争に夢を抱く。若き大和男子
- 男二 男一に続く大和男子。岡山の連隊に兄がいる。
- 能面一 苦尾部落西南に住む農夫。愛犬を飼っている
- 能面二 苦尾部落の北西に住む人妻。娘と共に夜這いをかけられる
- 能面三 苦尾部落、東に位置する養蚕業を営む老人
- 能面四 苦尾部落最北端に住む三児の母。持病持ち
- 能面五 能面四の夫。農業を営む傍ら陶芸で生計をたてる

序章

〔苦尾部落北西跡地廃屋にて〕

トラツグミの鳴く声がどこか遠くの山々から木霊する
苔むした家々からは仄かな埃の詰まるような匂い
時折目につく生活の名残が廃村の望郷を一段と彷彿させる

〔腐った板を踏みつける音〕

窓際に佇む少女のような何かがそこにいる
動かず窓の外を見ている姿は妙に艶かしくもあり幼くもある
時間の経過に伴って聞こえてくる優しい仏具の音色
少女は青春の日々をまるで味わうかのようにしっとり動き出す
初動は遅いが、肉体を形成しようと粒子はぶつかり
徐々に少女の面影を作り出していく

〔腐った板を踏みつける音〕

ふと観客席に足を伸ばして座る男のような何かがそこにいる

男のような何かの挙動が次第に大きくなり

雑踏した街並みを歩く時に聞こえる喧騒を彷彿させる

ふと観客席に佇む傷の女に萎れた男

無邪気な子どもに齒のない老婆のような何かが蠢いている

刻一刻と刻まれる時の流れが彼らの存在を明瞭化し

模範的ではあるが記憶を辿り死と再生を繰り返す

その様相はまるで無機的であり、有機的であるとも言える

だが激しいものは一人もいない

彼らは現象を繰り返しているだけだから

恍惚とした彼らの様相は不気味にも半笑いであり

まるで能面をつけたシテのように冷たく孤独な煉獄へ誘い込む

「時計の音が重く鳴り響く」

ぽつねんと立ち尽くす能面の男が面を外す

「岡本 幸生」 彼もまたこの地に縛られている亡霊の一人である

幸生は学生服と血に染まったナシヨナルランプを身につけ

一際目立つ大きな猟銃を1挺肩にかけている

幸生

姉さんへ。お元気ですか。あなたが見る月も煌々と輝くあの満月で
ある事を僕は切に願うばかりです。ふと、目を閉じる度に思い出す

のは幼き姉さんの姿。父母が眠る加茂の溪谷美を背に向けて、一所懸命に「おしろのさん」を歌ってくれたあの温もりを昨日の様に感じます。今度は幸福に生まれたい。僕は月明かりの届かぬ暗い地下にて姉さんの多幸なるべき事を常に祈っています。　　：　　もはや夜明けも近づいた。死にましよう

幸生は猟銃を胸へと当てる

「百合絵の縁談を祝う笑い声」

遠くから聞こえてくる優しい歌声、女性の響く笑い声
幸生の世界は再びあの過去へ巻き戻るのであった

第一章

「一九三六年 五月某日 縁結びの日」

西陽が仄かに差し込む夕刻の時

家の一端に置いてある蓄音器から聞こえる甘いレコードからは
この家に愛だの夢だの哀愁の積年を塗り込んでいく
端には祖母ちえがぼつねんと囲炉裏の前に腰を下ろして座っている
手元には半分に減った一升瓶とお猪口が三つ
今にも消えそうな豆電球が彼女を包み込む

「戸を開ける音」

幸生 おばやん。蓄音器切ってくれんか

ちえ …

幸生 姉しゃんぐっすり眠っておる

ちえ 幸生はまだ先の事焦る必要はないけん

幸生 何寝ぼけておるんや。わしはずっとここにおるやろ？あーあ涎こぼ
しちゃってさ

ちえ (レコードを消す) あんたはもういいのかい？

幸生 そんなのはもうよかよ。肺病ちゅうもんは、一過性の流行病。わしがうかうか療養で寝ておったら、おばやん骸骨なって化けて出るかもしれんじやろ

ちえ それは嫌じゃ。わしはあんたの孫が見たいけんの

幸生 孫はもうすぐじゃ。明日にでも子供の一人や二人連れてくるけん

ちえ ； 幸生。本当はどうなんじゃ

幸生 なんや。そんな改まって。ようやく姉しゃんも腰（を）据えた。そんなに暗いと姉しゃんだって嫁ぎづらい

ちえ 大事な話じゃけん

幸生 なに大丈夫や。わしかてこんな生活とはもうおさらば。前途有望な青年として、時代の大きなうねりの中で立派に（兵隊さんとして）努めを果たしにいくけん

ちえ （囲炉裏をいじる）ほんなら、お前さんそろそろ手に職をつけてもいいと思う。お前も来年には二十歳。嫁さんもらうにも岡本家の総領が職なしときたら相手方に申し訳が立たん

幸生 働くにはまだ早いと思うんじゃ、肺もまだ治っておらん

ちえ じゃが働かんとうちに金もない。今日だって縁結びの為にいくら出したか。ええか、あんこの着物に皆さんへのお食事代。うちだって家計は火の車やのに

幸生 その話はこの間もしたやろ。今日はよそう

ちえ （続けて）この間だって村の連中にお前が働いとらんのは教育がダメ

だのどうこう言われたわ。蓮子さんにも甘やかしすぎだとお灸を据えられた。そうじゃ、田植えをしてみるのはどうや。あんたが働いてくれたらわしだってもう少し楽できるってもんや

幸生 おばやん

ちえ 働かざるもの食うべからずや。あんこにもそう言わんな

幸生 (制止する)おばやん、やめや

ちえ じゃが、今言わんと。あんこだって加茂から離れるけん

幸生 今日はその話をしようない。姉しゃん綺麗じゃった。今日くらい夢

見させてもいいと思うんや

ちえ わしは長く生きた。年長者のことは聞くもんや

幸生 やめよう。な？

ちえ そない言われてもあんたがグータラ家におるんのがいけんのや。う

ちの娘やけん。嫁ぐ前にしっかり育てな

幸生 (咳き込む)

ちえ あんた

幸生 大丈夫や

ちえ そんなわけあるか

幸生 まあ待て、わしからも話があるけん

ちえ 待ってな水、持ってくるから

幸生 (療養所の紙きれを差し出し)東京の療養所。行くことにした

ちえ 療養所ってこない金どこから持ってくるんや

幸生 (息を整えて) わしは姉しゃんと約束した。ちゃんと病気を治す。それに最新設備に薬もある。なあ、おばやんも向こうで暮らせば

ちえ (療養所の紙きれをぐちゃぐちゃ)

幸生 何するんだよ!

ちえ 痛い。離して

幸生 返せよ

ちえ 行かせないよ。絶対に行かせんよ

幸生 (離す) もう知らん。そこまで自分の事しか考えておらんとは思わん

じゃった

ちえ あんたもわしを置いて行くんじゃ

幸生 置いてきはせんよ

ちえ 嘘じゃ。お前も百合絵と一緒に。わしを捨てるんや

幸生 :

ちえ いいかい。その東京の療養所は高いんやろ? 働きもせんでそんな金

どこにある。うちにそんな金はない

幸生 じゃあ働くけん

ちえ 嘘つくな。さっきまであんなに嫌がっていたのに

幸生 ああ。東京へ出たら仕事の一つや二つ取ってこれるわ。今じゃ畑だ

けじゃ食えんからの。ここの連中は気づいておらんがな

ちえ あんた、そんなに私を悲しませて楽しいか?

幸生 わしは百姓が嫌いや

ちえ 親父さんが大事に守ってきた立派な畑やない。あんたが百姓嫌って
どうする

幸生 嫌いなものは嫌いじゃけん

ちえ

：

幸生 わしは元々百姓ば好かんじゃった。じゃから、上の学校に進んで、
ちゃんと勉強して官吏か会社勤めをしようと思ったんや

ちえ

：

幸生 みんなおばやんがいけなかった

遠くの方からだんだんと近づいてくる二つの声

蓮子 結婚に対してどうこう言うつもりじゃないけどさ、あんたが今見て

いるお話？それは理想論、百合絵ちゃん見たでしよ。大事なのは恋
だのなんだの夢物語じゃないのよ。私たち百姓の娘は、特にさ

藤代 それは違うわ。百姓だって夢みたっていいと思うの。私は

「戸を大きく開ける音」

見慣れないモダンな服を着た二人「蓮子」と「藤代」が戸の前に立つ

蓮子の肌けたドレスの隅間から滴る汗の通り道

三十後半とは思えないその出立ちは、妖艶さを一段と際立たせる

蓮子の手には大きな一升瓶、少し量が減っている
それと対照的に黒のほつれた帽子を深々とかぶり
淡い水玉模様のスカートをしつかりと履く藤代から
十代特有の芋草さを明瞭に際立たせている

蓮子 あらら、お邪魔だったかしら

藤代 お邪魔します

蓮子 (座り込む) 夏っていうのは暑くて敵わんな

藤代 姉さん

蓮子 (上着を脱ごうと) 別にええやないの

幸生 (!?)

蓮子 幸生ちゃん、こんばんは

幸生 :

ちえ 二人とも、どうしたの。うちん子は奥でぐっすり、縁結びは終わり

ちえ じゃけん。さあ帰ってくださいな

蓮子 (一升瓶) ほら、飲み直し

ちえ いいよ、私だって縁結びで疲れているんだから

蓮子 (酒を飲み) だからでしょ

藤代 ちよつと姉さん。飲み過ぎ

蓮子 (構わず) 昔からね、縁結びの日は朝までどんちゃん騒ぎ。これ村の
掟だから。うちの旦那達ももうすぐくるころやし。せっかく村から

ちえ 嫁ぎ者が出るたにや飲み明かしましょうや
そりゃあ、あんたがたが百合絵を思ってくれるんは嬉しい。嬉しい
があんたんとこの道枝ちゃんまだ小さいやないの。わしはそっちの
方が心配で

蓮子

ちえ 連れないね。飲みましようよ。今日くらい

蓮子 だめや。子どもが家にいるならなおさら――

ちえ 私しやな行きます両親様よ今度なでくるな――え

蓮子 ほら。起きんさい

ちえ ねえ。おばやん、あんたは、よう頑張った。宗一さんと吉子さんが

死んでから、女で一つ。わしはあんたが死ぬまでこの村におるけん
の。だから安心してくれや。あんたを一人に絶対させん。これも村
の掟や

藤代 おばやん。これ(封筒)うちらからの気持ちや

ちえ (封筒を開ける)こんなに受け取れんよ

藤代 ええから

ちえ 受け取れんわ。こんな大金。あんたらだって家計が苦しいんて言う
のに。いらんお世話や

蓮子 じゃ遠慮なく

藤代 姉さん!

蓮子 冗談よ。おばやんこれうちらからの気持ちや

ちえ

：

藤代 (奪い)ゆきやん。これ。百合絵ちゃんに渡しといてよ。たまには美

味しいもんいっぱい食ってもバチは当たらんって

：

ちえ (ハンカチで涙を拭いて) ほんとすみませんね

蓮子 もう泣かんといて

ちえ 違うわ。目にゴミが入っただけ

蓮子 そない泣いたらこっちも泣きたくなるわ。湿っぽいのはやめて今日

くらい百合絵ちゃんのために祝いましうや

ちえ どうぞ。御入りください

藤代 ゆきやん、こんばんは

：

蓮子 (靴を脱ぐのに手間取る) 藤ちゃん。ごめん。先に行っててくれや

藤代とちえは奥の戸を開けて入っていく

幸生 あの

蓮子 (扇子で仰いでいる)

幸生 あの！

蓮子 聞こえておるよ

：

蓮子 そんなに見つめられても困るんだけど

幸生 蓮子さん。うちにはもう来んといってくださいと言いましたよね
蓮子 言ったかな。忘れたわ

幸生 :

蓮子 ねえ、肩貸してよ。足痺れちゃった

幸生 蓮子さん

蓮子 なーに

幸生 わしをどうしたいんですか？

蓮子 (耳打ち) ね。今日のアタシ似合っている？

幸生 :

蓮子 似合っているかって聞いているの

幸生 :

蓮子 (ため息) あんたさ見る目ないんじゃないの？これは大阪で流行って
るタ・ウ・ン・ド・レ・ス。知らないの？ : 驚いた。本当に知
らないんだ。あのね、これすごく高級なのよ。ほら！柔らかくて
気持ちいいでしょ

幸生 わしんことからかっておるんか

蓮子 (笑い) 顔。真っ赤

幸生 :

蓮子 (扇子を服の隙間から取り出す) それにしても暑いわね。今日。何？

幸生 別になんでもなか

蓮子 何さ : ああそう言うこと。明日の夜。戸を三回 : 鈍い男や

蓮子 あんま大きな声出すな。すぐ終わるけん
幸生 ダメですって

蓮子は幸生の股ひきへ手を忍ばさせる

幸生 蓮子さん

蓮子 (耳元で囁く) あんたの身体は正直や

幸生 僕は好きな人がおるけん!

蓮子 男はね、みんな口だけよ。あなたを愛しているだの、君だけを守るだとか言っておいてほっときや誰か他の女に愛しているよなんて言いふらす

幸生 わしはそんな事ないけん

蓮子 証拠あんの、ないならそういう軽はずみな事言わない

幸生 あるけん

蓮子 ふーん。ほれ。ほれ!

幸生 蓮子さん。ええ加減にしてください。こういうの不道德です

蓮子 (笑う) よくいうわ。あのね、あんたは気持ちいい事がしたい。私も遊びたい。これでお互いの利害は一致したのも同然でしょ?

幸生 :

蓮子 (耳元で) 嫌いになったの? オカイチヨウ

幸生 わしは好きな人がおるけん

蓮子
幸生

強情ね

蓮子さん辞めてください！

蓮子は股ひきから手を抜いて急いで靴を脱ぐ

蓮子

そんなに嫌な事

幸生

：

蓮子

そうよね。嫌なのに私ったら。幸生ちゃんごめんね、おばちゃんばかだからさ

幸生

：

蓮子

百合絵ちゃん元気になっている？

幸生

奥でぐっすり

蓮子

そう

ちえ

(遠くで) 幸生！幸生

幸生

(立ち上がる)

蓮子

(手を掴む)

幸生

：

戸に映る百合絵の影

蓮子はゆっくりと立ち戸の向こうへ旅立っていく

戸を一つ隔てた向かいの部屋から聞こえてくる楽しげな声

村民達が百合絵の嫁入りを祝し集まってきた

百合絵が出ていくこの「岡本家」に

わずかばかりの陽気な歌声、陽気な笑いが共鳴し

わずかな光がこの「岡本家」を包み込む

戸の向こうに移る彼らの影が

孤独を生きる幸生と対照的に明るく照らされる

次第に居間へ月の光が射し込み、陽気な世界に影が立ち込み

暗雲立ちこむ孤独な世界はより一層に沈んでいくのだった

第二章

「一九三六年 五月某日 縁結びの日 同日夜」

雨はすっかり上がり湿った空気が、ヒヤリと身体を触る宵の刻

輝く月の光量が幸生の寝床を淡く映し出す

幸生の姿に覇気はなく

ぽつねんと佇む幸生の手には酒とチラシが一枚

遠くの山をただじっと見つめているのであった

幸生 『花嫁御寮』

金蘭どんすの 帯しめながら

花嫁御寮は なぜ泣くのだろう

文金島田の 髪結いながら

花嫁御寮は なぜ泣くのだ

肺に鈍痛が走り倒れ込む幸生

酒を一気に流し込み肺のむず痒さを取り除こうと試みる

だが、酒の刺激は思ったよりも強く喉に止まり咳き込む幸生

過呼吸は幾ばくか続くが幸生は胸を抑えるしか打破する方法がない

死に物狂いで仰向けになった幸生は胸を撫でて深く呼吸をし
柔らかな呼吸で平常な身体を徐々に取り戻していく

藤代 (扉を開け) いた。もう探したんだよ

藤代はモダンな服に着られた芋草さの抜けない田舎の女
ふとモダンな服から垣間見る藤代の華奢な腕に丸い太もも
彼女が持つ柔らかな肉感はどこか色っぽい

藤代 (背中を摩る) ほら、落ち着いたけん

幸生 別に頼んでない

藤代 そうだね

幸生 :

藤代 ねえ。ゆきやん。今日の私どうかな

幸生 (背中を向ける)

藤代 あんた何拗ねてるの？これ見て。タウンドレスって言うんだ。生地
が柔らかくてさ、すごくね。暖かいの

幸生 :

藤代 ゆきやんの髪柔らかい。ねえ、全然昔と変わらないね。わかづくり
でもしてんの？

幸生 してない

藤代
ふーん

沈黙

幸生
藤代話があるけん

藤代
なーに？

幸生
ちゃんと聞いてくれ

藤代
：

幸生
わたしはお前が心配じゃ。これから行く宛はあんのか？わしかていつまでここにおるかわからない。それに――

藤代
心配ありがとう。でも私はこの村が好きなの。ほら（指を差す）荒坂

峠。あそこから見たお日様。覚えていてでしょ？毎日さ。朝起きてあそこから見るお日様好きなんだ

幸生
ええか。大事な話なんや、わしらかてもう成人じゃ。わしも軍隊（に）

入ってお国のために働かんといけない年頃じゃ。もう尋常小学校の頃とは何もかもが違うんだ

藤代
何もかもってあなたは変わらないわ。これからもずっとね

幸生
わしが言いたいのはそうじゃないけん

藤代は胸元からタバコを一つ取り出して口に啜える

幸生 お前吸うんか？

藤代 (啞えながら)蓮子さんが大阪よく連れってくれたのよ。そんな時に一本ちよつとね。最初はヤニくらで頭ガンガンでさ。それこそ地球がくるつと反転するようなおかしさなの。でも慣れたら止まらないのよね。あなたもどう？

幸生 そんなん身体に悪いわ

藤代 どうせ人生太く短くじゃない。やってられないのよ

幸生 (取り上げる)やめときつて

藤代 返してよ

幸生 こんなん絶対にだめだ。これだけはだめだ

短い沈黙があたりに響く

藤代 ゆきやん。嬉しいよ。でもね、本当は気づいているんでしょ？

幸生 ……

藤代 (ため息)私とあんたの仲じゃない。こんなお別れは嫌だわ

幸生 (お猪口に酒を組み)なんのことかわからん

藤代 わかっているくせに

幸生 飲むか？

藤代 ……

幸生 言ってくれなわからん

藤代 (手を握る)

幸生 :

藤代 今ここで止めてもいいのよ

幸生 :

藤代 (手を離さない)

幸生 (お猪口を渡し)ほれ

藤代 (お猪口を持つ) :

幸生 (酒を注ぐ)もしかして、お前も嫁入りか。おめでとさん

藤代 :

幸生 飲み。白菊じゃ。高級な酒やのに飲まんとは勿体ない

藤代 (酒を一気に煽る)

幸生 どうじゃ。うまいか？

藤代 ジロジロみないでよ。はずかしい

幸生 いや、どうして言ってくれなかった。姉しゃんも嫁いだ。お前も嫁ぐと来たもんや。こんなに嬉しいことはないけん。どこの村のもんや。幼馴染のよしみや、言うてみ。いいか？村を出稼ぎに行っている奴はやめとけ。あいつらは向こうで女作って遊び回るから、タチが悪い

藤代 :

幸生 藤代が嫁入りか。わしもそろそろ考えないといけんの

藤代 ごめん。余計なお世話だったよね。ゆきやんこれだけは覚えておい

て、わしはなあんたんことが心配なんよ

余計なお世話じゃ。わしは兵隊さんになって大日本帝国のために尽くすんじゃ。そのためにも情けん姿は見せとうない

(立ち上がる) そうね …… じゃあ帰るね

帰るのか

ゆきやんもさ、体につけてね。約束だよ

藤代！ あん時の約束。お前は忘れておらんのか

：

荒坂峠の帰り道。東京や(歌うように)ポツポと音鳴る汽車乗って帝劇行こうどこまでも。浅草寺に、花屋敷。回って食べよう味噌豆と甘酒少々口にして東京駅の鐘を聞き語ろう二人の夢夢を今更何かと思えば

思い出したか？

全然

そうか

： ねえ。もうすぐトラツグミの鳴き声が聞こえるの。散歩でもどう？

散歩は嫌じゃ、外は寒い

散歩に行きましようよ

：

歩きながら話したい気分なの。少し酔ったのかしら

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生

藤代

幸生 散歩は嫌じゃ

藤代 : わかった

幸生 散歩は嫌じゃが、その、藤代。わしと東京に行こう

藤代 え？

幸生 金はわしがなんとかするけん

藤代 遅いわ

幸生 だめか？

藤代 私結婚するんだよ？

幸生 そんなのただの口約束。どうにでもなる

藤代 私東京には行けない

幸生 (無視して酒を酌む) :

藤代 明日には縁談がまとまるの。向こうのご家族がね、私の事をえらく気に入ってくれたのよ。それに優さん。会社に勤めているって。それなりに裕福は保証するって

幸生 (酒を飲み) 会社員に勤めたからなんじゃ。いずれみんな兵隊さんに徴兵される。その優っていう奴は連隊に入隊したらすぐ死ぬぞ？会社員はどうせ貧弱じゃ。山の苦しさをなんもわかっておらん。わしにはわかる

藤代 私にはわからんよ。あんたのことが

幸生 東京駅から一緒に飛び降りよう

藤代 はい？

幸生

いや、近松に人形劇に出ていたあの二人、剃刀なんかで死のうとす
るから苦しんや汽車は速いからの。一発でぽっくりいけると思わん
か？

藤代

：

幸生

そう言ったのはお前や

藤代

ゆきやん。もう東京云々は子ども時代の夢物語よ(手を叩く)はい。

これでおしまい

幸生

こんなところに何がある？あるのは怠慢と退屈それだけや

藤代

：

幸生

みろ！この村の住人を！奴らは朝起きたら仕事して、お腹が空いた
ら飯食って、人の悪口言って、ただ毎日を自堕落に生きていく。こ
れが生活か？こんな怠惰な一生がわしの人生なのか？藤代。わしは
この村で退廃しながら畜生になるのは絶対にごめんや。もっとすご
い男になりたいけん

藤代

忘れましょう。ゆきやん。荒坂峠に私たちはもういないのよ

幸生

(彼女に覆い被さる)

藤代

ちよっ、ゆきやん。やめ――

幸生

(息が荒い)

戸に映る祖母ちえの照らす懐中電灯の影

幸生 (口を押さえる)
藤代 (モゴモゴ)

明かりは再び闇へと消えていく
辺り一面に無情な静けさが再び漂い
窓の隙間から僅かに差し込む朧月が二人の若き男女を照らし出す

幸生 (首に手をかける)

藤代 (もがきながら) 苦しいよ

幸生 (呼吸が荒くなる) なあ藤代。あん時の約束覚えてるんやろ

藤代 離して

幸生 (さらに力が入る) 東京。東京に行こう。藤代

藤代 東京だって同じ。行っても孤独は埋まらないよ

幸生 だからさ。行ったらお前を殺したる。だからお前もわしを殺してくれ

再び戸に映る祖母ちえの影

彼女の薄く光る懐中電灯が荒々しくこの廃屋を照らし出す

幸生と藤代は咄嗟に物陰に隠れ、息を潜める

ちえは戸を開け入ってくる

ちえ

(布団を直し) あんたまだいたの

乱れた服の蓮子が壁に寄り添って立っている
手には酒を持ち顔には青痰

蓮子

こんな夜更けに大声出されちゃたまらんわ

ちえ

こないところで突っ立ってないで亭主連れてはよ帰りな

蓮子

おしっこ

ちえ

トイレは反対じゃないの。子どもたち家で待っているんだから

蓮子

いいのよ。今日くらい私は自由に生きるの

ちえ

あのね。年寄りの戯言かもしれないけどあんたはもう親なのよ

蓮子

おばやん。私かて女よ？そりゃ一人になりたいときだってあんの

ちえ

：

蓮子

もう高齢なんだから無理して死に急ぐことも無いでしょ

ちえ

：

蓮子

幸生やろ？あのこだってもう立派な男なんやから。親離れせな

ちえ

あの子、近頃おかしいのよ。家にいないこともよくあるし

蓮子

そないな事、思春期の男の子には当たり前。心配しすぎ

ちえ

でもあの子までいなくなったらわしは――

蓮子

わしがおるやろ？ここはお姉さんに任せときって。(敬礼)岡本ちえ

どのわしが責任を持ってこの場を任されたでございませうゆえに安心

ちえ
して床についていただきますよう要請をお願いいたします

蓮子
： いいわ。あんたも用済ませたらはよ帰りなさいよ

ちえ
合点承知のすけ
(去る)

窓から差し込む月夜の光、優しい月夜の光の中にある数本の棘
まるで蓮子の存在を憂鬱に映し出すがの如く朧に光る棘

蓮子は一人座り込み服の隙間からタバコを取り出す

中々つかないマッチの火

弱々しく音を立ててついたマッチの燃える火の魂からは

マッチ独特の甘く芳醇な香木の香り

彼女は一服をして一人タバコを蒸し朧月を眺める

ふと聞こえる鈴虫の鳴き声は

この夜更けの空に涼しく鳴り響くのだった

藤代は我慢できずに飛び出す

蓮子
！？

藤代
： こんばんわ

幸生
あっこれはその――

蓮子
幸生ちゃん。知っている？女は若く死に、男は老いて死ぬ

幸生
：

蓮子 (去りながら)花嫁御寮

金蘭どんすの帯しめながら

花嫁御寮は なぜ泣くのだろう

文金島田の 髪結いながら

花嫁御寮は なぜ泣くのだろ

「藤代がドレスを直す音がずっと続いている」

幸生 藤代今日はその――

藤代 いいよ

幸生 え？

蓮子 だから東京。私あんたについてく

幸生 …

藤代 その代わり責任取ってくれなきゃあんたのちんぽを切り取るから

冷たく淡い灯に照らされて彼らの喘ぐ声が夜の帷へこだまする

愛の囁きはうねりの中で絶えず変化する

柔らかな無花果を優しく噛み締めるように

快樂の渦樂の悦へとひきこまれていく二人の喘ぐ様

本能に従った醜い人の成れ果ては次第に一つの形に収縮される

ふと、百合絵の残像が奥の戸の向こうへ映り込む

姉の影は真っ直ぐとこちらをのぞいている

「藤代は幸生の首に手をかける」

「幸生もまた藤代の首へ再び手をかける」

戸の向こうに映り込む姉の影に目を向けた幸生は咄嗟に手を離す

蓮子 こういうの、悲劇的序曲って言うのかしら。ここで死んだらきつと

みんな驚くだろうね

：

蓮子 ゆきやん黙らないでよ

違う。こうじゃなか

蓮子 (首を再び絞める)でもさ、これで良かった。なんか啄木の詩を体現
しているみたいだもん

(払い除け)違う。そうじゃない

：

幸生 ワンコみたいにおカイチョウ。これは近代を生きる日本人の姿じゃ
ない

蓮子 どうしたの急に

幸生 藤代。わしたちは醜い。俺がお前へ愛を囁き愉悦の時を過ごしても、
お前がどんなに背徳の海に沈んでも、どうせわしたちは何者にもな
れないんだから

蓮子 はっきり言ってよ

幸生 ごめん。やっぱり東京には行けない
蓮子 (荷物を煩雑に持って急いで出て行く)

どこからともなく聞こえてくる軍隊の歌う声
軍医とその志願者たちが行進しながら入場してくる
彼らは能面をつけシャツに短パンを着たまま入ってくる

軍医 軍歌。歩兵の本領！はじめ

全員 歩兵の本領

万朶の桜か襟の色
花は吉野に嵐吹く
大和男子と生まれなば
散兵線の花と散れ

第三章

「一九三七年 五月某日」

日本が戦争へ行くことを正義とした時代

徴兵検査のために体育館に併設された仮設の検査場

大和男子の汗と青春の香りが悶々と漂うお昼時にて

体育館から聞こえる若き息吹が陰惨とした空気を吹き飛ばす

徴兵検査とはいわば「通過儀礼」

甲種合格をする事ができれば一人前の男として認められる

大和男子たちは綺麗に並び今か今かと英雄になる瞬間を待ち続ける

軍医
気をつけ！

全員
(背筋を伸ばす)

軍医
大日本国帝国陸軍少佐、荒牧 豊である。若き大和男子達よ。忍耐

をもて、努力を怠るな。今こそ熱き闘志をお国のために捧げるのだ。

はじめ

手を挙手し出す大和男子達、唸る声の中、軍医は男の前に立つ

選ばれた男は前に立ち、他の大和男子は周りを走る

男一 高田 はじめ。よろしくお願ひします

軍医 (聴診器を当て) 心身共に良好。甲種合格

男一 ありがとうございます。お国のために全身全霊努めます

軍医 次!

再び唸り出す男達

当時、若者にとって軍隊へ参加することは名誉であり

軍隊で過ごす日々こそが青春だったのだ

幸生もまた肺を押さえながら、その荒波に負けじと声を荒げる

男二の前に立つ軍医

男二 棟方 敏夫。よろしくお願ひします

軍医 (聴診器を当てながら) 君のお兄さんは岡山の連隊に所属しているね

男二 兄をご存知なのですか?

軍医 (聴診器をあて) 彼からは話を聞いているよ。立派な軍人だ。家族も

さぞ誇らしいだろう。甲種合格。頑張りなさい

男二 はい!

軍医 次!

再び唸り出す男達

幸生も負けじと声を荒げるのであった

軍医は幸生の前に立つ

幸生 岡本 幸生。よろしくお願いします

軍医 (聴診器を当てて) 肺がやられておる。しっかり療養しなさい。丙種

合格

幸生 (慣れない敬礼) 軍医殿、ちよつと待ってください

軍医 何だ貴様。日本軍人医師のいうことが聞けぬというのか

幸生 わしは肺結核じゃなか。もう一度調べてくださらないでしようか

軍医 馬鹿者。貴様は肺結核だ。病気持ちが悪場に行つてどうする。しつ

かり療養せい!

幸生 でも――

軍医 くどい! 次

∴

軍医 (笛を吹く) 静粛に! 本日の検査は以上である。皆の衆、日々鍛錬に

励むように!

全員 はい!

[Vivaldi - Concerto for Two Violins in A Minor RV522]

銃撃の音が遠くの方から鳴り響く

先ほどまで夢踊らせていた若き青年達は列をなし

支那の地へと旅立つ準備を始める

全員
(万歳三唱)

能面をつけた集団が一人、また一人と増えていく

〔一九三七年七月七日〕

中国の北京郊外盧溝橋において

大日本帝国軍は中国抗日民族統一戦線を率いる

「蒋介石軍」に攻撃を開始した

この事件を皮切りに日本は中国と全面戦争へ歩みを進めるのである

軍医
撃ち方初め！

〔轟く轟音、劇場は揺れ辺りに漂う火薬と死臭の劈く匂い〕

若き青年達を模した能面達は、切磋琢磨に汗水垂らし

再び塹壕と思わしき「岡本家」を作っていく

幸生はそんな熱き青春を傍に見てぼつねんと動けずにいた

軍医

諸君！支那の戦も間も無く佳境。我々の勝利で幕を閉じるであろう。
暴支膺懲。大日本帝国の意地をきやつ等に見せつけるのだ！軍歌。
歩兵の本領、はじめ！

全員

万朶の桜か襟の色
花は吉野に嵐吹く
大和男子と生まれなば
散兵線の花と散れ

歌いながら去っていく兵隊達

先ほどまで戦っていた若者達の熱気と闘志が渦巻くこの空間から
ぽつんと穴が空くように寂しさ残る廃屋へ舞台は移行する

戸に浮かび上がる百合絵の幼き姿

手毬をする小さな面影はどこか寂しく懐かしい

幸生はその影のある方向へ姉を追い求める無邪気な子のように
誘われていくのであった

第四章

〔一九三七年 八月十五日〕

鈴虫達の優しい響きが舞台上を包みこむ

月の明かりに照らされて雨の染み込む躍動が

少しずつ家を蝕みながらゆっくりこの「廃屋」の秩序を犯していく

家の一端に置いてある蓄音器から聞こえるレコードの擦れた音

幸生は小さく疼くまりながら座っている

〔戸が突然開く音〕

濡れた服装の蓮子は急いで入ってくる

蓮子 (服を絞りながら)おばやん。おばやんいる? なんなのよもう。ゆう

うだちなんてついてないわ。あーもう!(蹴る)痛ったーい

幸生 (タオルを持っている)ん

蓮子 : あらありがとさん

幸生 風邪ひくけん

蓮子 珍しいね。優しいじゃん

幸生 乾かしたら帰ってくれ
蓮子 (タバコを啞え)言われなくてもそうするわよ

蓮子は胸元からマッチを取り出し火をつけようとする
中々つかないマッチの火

蓮子 ねえマッチない。マッチ

幸生 (目を背ける)

蓮子 (頭を撫でようと)あれれ？幸生ちゃんどうしたのかな

幸生 (払い除けて)やめろよ

蓮子 釣れないね。濡れたいいい女がこんなあられもない姿で立っている。

みかじめ料とってももいんだからね

幸生 (戸を開けて)帰ってください

蓮子 本気じゃないでしょ。こんな雨降ってんのに風邪ひいちゃう

幸生 帰ってください

蓮子 わかった。私が悪かった。ね。

幸生 :

蓮子 おばやん寝ちゃったよね

幸生 今何時やと思ってんじゃ。人様の家に訪ねる時間やないやろ

蓮子 道子の事で相談しようと思ったの。最近体調が悪くてね。咳が止まらないのよ、ねえあんたもいい薬、知らない？

幸生
蓮子

おばちゃんには伝えておくけん
そうよね。私お邪魔よね。幸生ちゃん。じゃあまた今度くるけん。
おばちゃんには私が来た事伝えといてね。大事な話やから(扉を開ける)

短い沈黙

蓮子

幸生ちゃん

幸生

ん

蓮子

何さ元気ないよ。ほんとどうしたの？

幸生

なんでもなか。はよ帰れ

蓮子

嘘。おばちゃんにはなんでもわかるけん。当ててあげようか

幸生

：

蓮子

教えてくれない？

幸生

：蓮子さん、わしこの家を出ていくけん

蓮子

(タバコを手に取り)出ていくって、宛はあんの？

幸生

ある

蓮子

止めないわよ

幸生

それだけじゃ

蓮子

あのね、世の中そんなに甘くないの。東京なんて特にそう。上海で
兵隊さんが戦ってるのに、こっちじゃ東京オリンピックをやるとか

なんとかか。お国はお国でどんどん取り締まりするじゃない？私たちが庶民に居場所はないの。あるのは先の見えない明日だけ
それでも出ていきます

蓮子
で、戻ってくる

幸生

蓮子
： 幸生ちゃん。ここに座りな

幸生

蓮子
ほら！

幸生
（座る）

蓮子
幸生ちゃん、本当にどうすんの？仕事もしないで

幸生
仕事はある

蓮子
仕事ってお家で布団にくるまるそれが仕事

幸生
蓮子さんは嫌なことばっか言って嫌いじゃ

蓮子
そんな言い方はないんじゃないかしら

幸生
嫌いじゃ。帰ってくれ

蓮子
まずは、目先のこと考えないと。宛はないなら畑を耕すしかないん

じゃない

幸生
正吉おじちゃんが炭焼きに連れてってくれるけん

蓮子
（タバコを蒸しながら）炭焼きね。あれも大変よ。うちの旦那なんか

一ヶ月音さだなしで帰ってきたら炭まみれ。みれたものじゃないの

よ

幸生
：

蓮子
（タバコを消して）蛙の子は蛙

幸生
わしはできるけん。小さい頃よく手伝ってもらったし。わしの心は炭焼き職人や。それに

蓮子
それに？

幸生
なんでもなか。どうせ蓮子さんは笑うけん

蓮子
笑わないよ。ほら言ってみ

幸生
： わし夢がある。稼いだ金で肺（を）治して。その、でっかい男になりたい

蓮子
でっかいって映画スターみたい。幸生ちゃん観た？新しき土。ドイツと一緒に創ったやつ。やっぱ原節子よ。私あんな女の人になりたい
幸生
そうじゃなか

蓮子
映画が嫌なら何？軍隊さん？そりゃすごいけどさ、丙種合格でしょ。
内地でやるしかないんじゃない

幸生
（布団にくるまる）

蓮子
そ。勝手にして

沈黙

蓮子
（レコードを手に取る）ねえ。私音楽家になろうかしら

幸生
：

蓮子 無視すんなって

幸生 放っておいてくれ

蓮子 (レコードを持ち)ほらこれとかどう？ベードベン？何これ、威厳そ

うな顔しちゃってなんかムカつく(別のレコード)なんか詩的な感じ。

私才能あるのかも。幸生ちゃんあんた音楽詳しいでしょう？これ英語でわかんない。なんて読むの

幸生 アルビノーニじゃ

蓮子 (笑う)アルビノ

幸生 アルビノーニ！

蓮子 はいはい、アルビノね

蓮子はゆっくり立ち上がり、蓄音器に先程のレコードをセットする

蓮子 えー。紳士淑女の皆様。本日は苫の地最南端にお集まりいただき

誠にありがとうございます。えー我々交響楽団 … (ポケットに六

十六銭)六十六銭。いや活動家なんてみんな意味もない変な名前つけ

ているじゃない。なんとか座だっけ？忘れたけど。あーもう。それ

と一緒に。一緒 … 改めて。えーちんちくりん顔のちんちくりな

歌による大合唱祭を今宵は楽しんでもらいたく存じ上げます。では

聞いてください(小声で)幸生ちゃん。名前なんだっけ

幸生 アルビノーニ

蓮子

アルビノたちの夢踊る大演奏会

蓮子は蓄音器のハンドルをゆっくり回す

ギシギシ回すその様は妙に美しい

すると遠くの方から聞こえてくる子供たちの笑い声

あたりは暗く朧げに少女が一人舞台上で手毬をしているのであった

「Albinoni : Oboe Concertos」

数刻前

誰かが息したこの廃屋に

命の炎がゆらゆらと消えては燃えての繰り返し

ふと聞こえてくるのは女の声

「手毬の少女元氣よく」

「能面女は月を浴び」

「欠けた笑顔の老女そこにいる」

女はそれぞれ舞台と客席動いては、おいでおいでを繰り返す

女達

おいで、おいで、おいで

死者の冷気に当てられて、囁く少女の鞠歌懐かしく

虫の羽ばたき鳴かないあの世の理こちらに干渉どんよりと
死の持つ狂気は踊って舞って

愛と別れのあの世にて幸生の形は具体的

記憶と結果の狭間にて

うつらうつらと位置する昭和初期、東京遠くに苦の地この地
能面男も現れ気づけばそこは煉獄の、記憶と呼ばれる過去の世界
そこに息づく能面達はおいでおいでを繰り返す

能面達

おいで、おいで、おいで

観客は記憶が繰り返される煉獄の

そのまた彼方の煉獄へ、小さな足を踏み出して

今宵の月は朧月

能面達も段々と、記憶の彼方へ消え去って

命が芽吹いた「岡本家」

傷跡消えて、雨の音、舞台は過去へと巻き戻る

気づくと、幸生窓際に、ぽっん・ぽっん・ぽっねんと

たたずむ背中に風が吹く

蓮子

(蓄音器の鉄針を上げて)幸生ちゃん

幸生

ん？

蓮子 私とこの村でよっか

幸生 え？

蓮子 何度も言わせないでよ

幸生 いいんか、道子ちゃんいるんじや

蓮子 だってほら。あんた東京いきたいってずっと言ってたじゃない。これもお姉さんの務めよ

幸生 うん

蓮子 ほら六十六銭。一人頭三十銭これで汽車に揺られて明日には東京。

六銭はどうしようかしら。そうだわ！甘いお菓子買おうよ。私あれ食べてみたい。ビスケットだっけ。食べたことないのよね

幸生 六十六銭じゃいけないよ。汽車は高い

蓮子 じゃあこうしましょう。今から一年後、東京に行くの。そのためにあんたは私のために働く。今日は八月十五日だっけ？来年の今日、あなたは私と駆け落ちするの。そして、この世の不条理に心を痛めた男女の二人は来世で結ばれようと身を投げる。ほら、曾根崎心中。大阪行った時やってた人形浄瑠璃。私もはつみたいに綺麗に死んでこの世とさようなら。バイバイって

幸生 そのあとは？

蓮子 その後： だから来世に行くんでしょ

幸生 死ねなかったら？

蓮子 あんたは質問ばっか。いいわ。私があんたを地獄の底まで陰道を渡

してあげる

幸生

：

蓮子

だからあんたは徳兵衛のように私を冥土へ連れてってよ

幸生

(机に置かれた六十六銭を見る) ：

「時計の音が静かになり響く」

幸生

(咳き込む)蓮子さん、水を

蓮子

えっあ、大丈夫？ごめん。水ね。水。ちよっと待ってな

幸生

(水を勢いよく飲む)

蓮子

(背中をさすり)おしろのさんおしろのろさん

おんしろしろしろ しろきやの

おこまさん さいじよさん

煙草の煙がじょうはっさん

相手にならぬはおこむらさん

ひいやふう みいやよう

いつやむ ななやこ

とんとん叩くは誰さんじゃ

しげさん何しにお出でたら

せきだが代わってかいにきた

幸生

蓮子さん。蓮子さん！ちよっと待って

蓮子 え？あつ。ごめんなさいね

幸生 ……

蓮子 ほら落ち着いた

幸生 横暴だ

蓮子 (タバコに火)あんた身体は丈夫そうなのに

幸生 それ、やめてくれんか

蓮子 (タバコ)男の子でしょ。これくらい我慢しな

幸生 肺に籠るんじゃ

蓮子 (正座)ほれこっちへきてごらん。ここから見える月はまんまる月で

幸生 綺麗じゃない

幸生 (狼狽する)

蓮子 ほら

幸生は困惑しながら蓮子の膝枕へ頭を添える

蓮子を通して見える朧に光る淡い月

蓮子と幸生は朧月に照らされて、二人は甘い空虚に酔いしれる

幸生 蓮子さん

蓮子 ん？

幸生 一緒に働いてくれたらわし頑張れる

蓮子 それはだめ

幸生 どうして

蓮子 私か弱いから

幸生 か弱くなか

蓮子 女に産まれちゃったんだもん

幸生 蓮子さんは強い女だよ

蓮子 そうね。私か弱くないかもしれないね

幸生 (幸生は突然起き上がる)

蓮子 いたっ!

幸生 蓮子さん。カンカン持ってくるけん

蓮子 カンカン?

幸生 カンカンはカンカンや

幸生は急いで履き物を履いてこの場所から出て行こうとする

幸生 すぐ戻ってくるけん

蓮子 (手を振っている)

一人取り残された蓮子はしけたタバコを手にとって

つかないマッチを何度も何度も擦って投げ捨てる

戸に写る少女の影

少女はおしのろさんを歌いながら手毬で遊んでいる

静けさを打ち破るように遠くの方から断末魔の叫びが聞こえ

警鐘の鳴く音が遠くの方で響き渡っている

蓮子は急いで荷物を片付けこの廃屋を後にする

蓮子と入れ替わるように舞台上へ入ってくる幸生

手にはキャラメルやドロップがたくさん入ったカンカン

幸生
(カンカンを落とす)

「時計の鳴り響く音が刻みをあげて鳴っている」

幸生
姉しゃん、明日本当に結婚するんだね

突如レコードが一人でに鳴り響く

柔らかな音色を奏でる蓄音器から次第に鉄針が何度も何度も

同じフレーズに当たって抜けてを繰り返す

「扉を強く叩く音が鳴り響く」

慎一
(息も切れ切れに)幸生が、幸生がついにやりおった！

第五章

「一九三八年 五月二三日」

苦の地から約十キロは離れた駐在署の近く

真夜中に聞こえる川のせせらぎ

この駐在所の近くには川が流れているようだ

間も無く時計の針は夜中の三時を示す

「蓮子の夫」慎一はウロウロしながらその場を行ったり来たり

慎一は肩に一発の銃痕があり包帯が巻かれている

テーブルの上にはやかん

藤原

あんたね、人がもう二十人は死んでんだ

電話の前で怒鳴り散らすのは苦の地全体を管轄にする駐在さん

藤原

支那変で同僚は沢山お国に徴兵されたんです。うちもうちでんやわんや。ええ、今は私と女房だけです。私だけで？何を言ってるんですか？冗談じゃない。なんとかしてくれって

慎一

（水）

藤原 だから！緊急事態時に出勤できないなんてなんのための警察ですか。

慎一 この間だって、加茂川の方でぼや騒ぎがあったのに出勤まで1時間
：

藤原 今は戦争やなんやでお忙しいのはわかっています。ええ——えっ？特

徴？落ち着くのはそちらでしょう。： 黒詰襟にゲートル、猛獣用

口怪十二番地9連発の猟銃を手にし、日本刀を腰に指しています。

ええ、頭には二本の懐中電灯をつけナシヨナルランプを腹に今も苦

の地にて暴れております。ええ。幸生です。祖母岡本ちえを殺して

近隣の村人を殺害して回っているとのこと

慎一は藤原から電話の受話器を奪い叩きつける

慎一 埒が開きませんよ。所詮国家権力にも限界っちゅうもんがある

藤原 慎一くん。焦る気持ちはわかるが少し落ち着いてくれんか

慎一 落ちついているでしょ

藤原 じゃあ座ってくれ

慎一 (座る)ほら

藤原 椰揄うのはやめなさい

慎一 藤原さん、ワシらだけで戻りましょう

藤原 ：

慎一 冗談じゃありません、今戻れば幸生は確実に追い込めます

藤原 (受話器をり)少し黙ってくれ

慎一 (制止する)上の方は状況が見えておらんのです

藤原 離してくれ

慎一 いやじゃ

藤原 ワシらだけ村に戻っても何もできん。だからこそ冷静さは必要だ

慎一 あんた幸生に腰がひけているんじゃないんですか

藤原 私が？

慎一 はい

藤原 … ええか？あいつをは止められん所までできてしまった。君の気持ち

は十分んわかるが大事な今は今何をすべきかじゃ

慎一 …

藤原 離しなさい

慎一 嫌じゃ

藤原 離しなさい！

慎一 (土下座)お願いじゃ

藤原 …

藤原さん。お願いじゃ。あいつ等の仇を一緒にとつてくれ

藤原 …

慎一 お願いじゃ

藤原 日本男児が情けない姿をみせるな

慎一 お願いじゃ

藤原

：

慎一

あれは鬼だ。鬼の類や。早くしないとみんな殺される。お願いじゃ、あいつを殺してくれ

藤原

私は彼を殺すことはできない。それが仕事だ

慎一

子ども達があので呼んでいるんです。幸生の脳天をぶちまけろつて。わしは呪ってやりたいあの外道を。今すぐこの場で殺せるんやったらなんでもする

藤原

慎一くん。もうよしなさい

慎一

あんたは飛んだ腑抜けじゃ、所詮幸男生が怖くて腰が動かん。そうじゃろ？

藤原

いいか？こういう事態にむやみに動くとお前さん自分の命まで持つてかれる。状況は悪くなる。大事なのはこれからの命や

慎一

藤原さんほんまどこまで骨抜きにされてんですか？それもあれですかお国の利益のためについてやつですか

藤原

：

慎一

幸生を見とらんかったのも国のせいだというなら納得がいくわな。

藤原

ほれ末端がこれじゃから

慎一

あまり口が過ぎると足元掬われますよ？

藤原

ワシらは被害者じゃ

慎一

それはどうだか

何が言いたい

藤原

そのままの意味だよ

慎一

どういう意味じゃ説明しろ

藤原

君たちが幸生を追い込んだんじゃないのか？え？

慎一

追い込んだって人聞きが悪い

藤原

ああ、幸生をまるで腫れ物みたいに扱って寄ってたかって誹謗して。

同情で幸生を庇おうと思わんが、あの子は十分苦しんだ。それがこの結果じゃ

慎一

お前本気で言っているのか？

藤原

君だって内心ほっとしているんだろ？蓮子も子どももいなくなつて

少しは気が楽になつたじゃないか。ようやく一人で生きていける。あんたずっと言っていたじゃないか。蓮子はダメな女だ。あいつは疫病神じゃって

慎一

(殴る)ふざけたこと抜かすなよ

藤原

：

慎一

(馬乗りになつて)畜生。畜生。畜生。じゃあどうすればよかった。

どうすることが正解だった。何度も何度も夜這いの事実を我慢した。蓮子が毎晩いなくなつても子ども達のために毎日毎日働いた。その結果がこれですか？どうして家族と過ごすこんな単純な幸せを私は享受できない

藤原

：

慎一

藤原さん。なんか答えてくれや！

〔沈黙〕

藤原 慎一くん。恨みで人を殺しても誰も英雄にはなれないよ。幸生と同

じ地獄へ片道切符。復讐で何が解決する。虚しいだけなんだよ（や
かんの水を掻き込む）私にできることはあいつを務所にぶち込む事
だけだ

慎一

：

藤原 飲みなさい

慎一

：

藤原 飲みなさい

慎一

：

藤原 そこで汲んだ大地の味じゃ。落ち着く

慎一 （嗚咽）

〔静かに電話のベルがなる〕

藤原 （受話器を取り）はい。加茂町駐在署勤務、藤原です。はい。はい。

先程は失礼しました。

〔二発の銃声如山々を抜けて轟く〕

藤原

はい。消防隊と合流ですね。はい、私が案内します。ええ。幸生が民家に立ち寄った？わかりました。荒坂峠ですね。はい。では後ほど

藤原

(遺書を取り出し)これを女房へ

慎一

：

藤原

もし帰ってきたら献杯をしよう。約束や

藤原は制服をすっかり着こなしその場を後にする

一人だらしく取り残される慎一は涙を吹いて扉の近くへ移動する

慎一の後ろに佇む少女の影

舞台中央で朧月に照らされて

その寂しげな様相で窓辺に座る様は惨めであり

煉獄の持つ連鎖の虚しさをより強調させるのであった

蓮子

幸生ちゃん。こんばんは

第六章

「一九三八年 五月初旬」

夜空は白身を帯びて太陽の喜びを受ける夜明けの刻
今にも壊れそうな廃屋に、蓮子は酒を持ち正座で座っている
トラツグミの鳴き声が遠くから囁き木霊する
縁側に座る蓮子はうつらうつらとこうべを揺らし
淡空の朧月から差し込む柔らかな光が牢獄に囚われた鳥のように
消えそうな光となって蓮子を映し出す
幸生が闇夜の底にそっといる

幸生 蓮子さん黙っても罫が開かんやろ

蓮子 :

幸生 あんたのことちよっとわかった気がする

蓮子 !? ちよっ。やめやめてってば

幸生 蓮子さん。蓮子さん

蓮子 幸生ちゃん今日はあかん。あかんってどうしてもや

幸生 一緒に東京行きましょう。東京行けば

蓮子 ワシには無理な相談じゃ

幸生 :

蓮子 あーあお酒こぼしちゃったじゃない

幸生 すまん。今拭く。だからワシを捨てんでくれ

蓮子 捨てないよ。別に―ねえ

幸生 蓮子さん！これ濡らしちゃったから。姉ちゃんのおフルなんだけど

蓮子 幸生ちゃん

幸生 (服を見せ)どうかな少しきついかもしれんが、蓮子さんなら絶対似

あう

蓮子 幸生ちゃん。聞いて

幸生 聞いてるよ。でどうしようか

蓮子 幸生ちゃん。話があるけん

幸生 (座る) そんなこわい顔せんでもっと笑顔で話しましょうや

蓮子 :

幸生 わしわからんよ。なんじゃ腹空いてんのか

蓮子 幸生ちゃん。私に近づくのもうはやめて

幸生 :

蓮子 (正座)お願いします

沈黙

幸生 言っている意味がわからん

蓮子 娘もな、ずいぶん大きくなってきた。そろそろ尋常小学校に通うん

や。世間体の事もある。わかるやろ？

：

それにな、肺結核。わしもうつるのは何かと困るんや

あんたまでわしを見限るか

ごめんなさい

謝るな。惨めになる

ごめんなさい

蓮子 蓮子さん約束したよね？倉見の川で。初めてオカイチヨウした時に

わしと二人でいつか暮らそうって。赤子はどうなる。あんたのお腹

にいる赤子や

あんた本当に何も知らんのね

え？

しじみ拾いに行きました

わからん

言わせないでよ。嫌い

：

蓮子 あなたは知らないでしょうね、野菊の莖ってさ痛いのだよ――あの時、

来てくれなかったじゃない

それは、ご愁傷様で

：

幸生 (封筒を投げ出す) じゃあ、これでいい

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子

幸生

蓮子 (封筒が置いてある)何これ

幸生 あんたも好きやろ。オカイチョウ。慎一とご無沙汰だったのはみんなから聞いている。そない、茎でげんこつばっかせんでもええ。わしの逸物で気持ちよくさせたるから

蓮子

幸生 ほれ、1000円　：　足りないか？わかった金はなんとか工面する

けん。借金あるんやろ？慎一のことや。女でも作ってお前にかぶせておるに決まっている

蓮子 痛い。痛いよ！

幸生 (離さない)

蓮子 嫌い。嫌い。嫌い！あんたが嫌い

幸生 そない嘘思っても言うなや。倉見の川からの付き合いじゃ。わしも

蓮子 お前のために人肌脱ぐから。お願いや

蓮子

幸生 な？

蓮子

幸生 (小さな嗚咽) わしを一人にせんでくれ

蓮子 は？なんの冗談？やめてよ。気持ちが悪いわ。あなた

幸生

蓮子 気持ちが悪いって言ってんの。そうやって同情を引こうとしている

おつもりだけど。私はあんたの何？お母さんじゃないんだよ。私は

蓮子 幸生

：

お前は病氣持ちや。ろくに仕事もしないで家でゴロゴロばっかして。丙種合格やからって、お国に努めもせずになにかあればわしは肺結核じゃから仕方ない。蓮子さんあんたのオメコはわしの支えや。ふぎけないでよ。あんたのちんぽこは犬コロのちんぽこよりも貧弱だわ。まだ康二さんの方が気持ち良かった。ねえわかるでしょ？あんたはもうおしまい。蓮子ちゃんあなたを切ります、バイバイ

勢いよく蓮子に飛びかかる幸生、蓮子は逃げようとして足を挫く逃げ場のない蓮子にいきなり首を絞め怒声を浴びせる幸生

蓮子 幸生

殺してやる。お前を殺してやる

殺せるものなら殺してみろ。お前等如き肺結核患者に殺されるものはおらん

幸生は蓮子を床に叩きつける

蓮子は頭蓋骨を揺らされて昏倒しかける

幸生

ほれ。お前ら女子が大好きなちんぽこをぶち込んでやるけんの。所詮お前も女や。これがなきや生きていけん。ワンコウと一緒に。ほら吠えろよ。あの時みたいに微睡のなかでやったあの快樂をお前に

叩き込んでやるよ

蓮子の服を破きそのまま犯そうとする幸生
蓮子は何度ももがき幸生を叩くが抜けられない
戸が勢いよく開く

慎一
幸生

今大事なところじゃけん。部外者は黙ってろや

慎一
幸生

離せ
何するんじゃ！

慎一
幸生

おのれのしていることわかっているんやろうな
人の家入ったらまずは失礼しますやろうが

慎一
幸生

殺したる。おばやんの前だから押さえておったが今日ここでお前の
墓標を立ててやる

蓮子
やめてよ！

慎一
お前はどっちの肩を持つ

蓮子
：

やれるものならやってみろよ、ぽこちん野郎

慎一
上等じゃ。このロウガイスジが

幸生は慎一に向かって大きく突進をするが交わされる

幸生

(血を吐く)腰抜けが

幸生は突如肺に力が入らなくなる

幸生

(咳き込む)

幸生の手には血が混ざり、咳は止まらない

慎一は猪突猛進の如く突っ込んでいく

幸生はそれから逃げず受け止める

慎一は体制を変え頭突きを喰らわし、幸生は昏倒する

幸生は玄関にあった銃を見る、慎一もまた銃を見る

二人は急いでその場所へいくが、足をつまづき転がる慎一

幸生は銃を持ち慎一へ向けて構える

慎一

なんやそないおもちゃで脅してるつもりか？

幸生

(息も切れ切れに)ほれ。鳴けよ。わんわん。犬コロみたいに鳴いた

ら撃たんでやるよ

ちえ

もうやめてくれ

ちえと藤原が一緒に入ってくる

藤原 幸生！自分（が）何をしているかわかっておるんか

幸生

ちえ とうええやろ。あんたも

慎一 おぼやん。こいつの魂は地獄に浸かったほんまものの鬼や。だから

ここで、死ね、幸生

幸生

ちえ とうやめてくれ

幸生

ちえ あんた、もう問題はおこさんでくれ

慎一が幸生の前に立つ

慎一の放った拳が頬にぶつかるが微動だにしない

藤原 慎一君

慎一

藤原 もう十分やないの

ちえ （蹲って泣いている）

藤原 慎一くん

慎一 （吐き捨てるように）蓮子！

蓮子 （腰が抜けて立てない）

慎一 立てるか？

蓮子 (慎一の裾を掴む)

慎一 :

蓮子 みくびらないで。足が痺れて立てないだけよ

慎一 (彼女をおんぶ)藤原さん。あとは頼みます。そいつをもう村にいさせんよう檻の中で調教してください。お願いします。わし次会うたら何するか分かりませんから

慎一 は戸を開けて出ていく

居間に広がるちえの泣きじゃくる声が永遠に鳴り響く

第七章

「一九三八年一月某日」

三月の肌寒さが部屋一帯を覆いこむ三月の宵
春前に吹き荒ぶ春一番のように窓へ吹き荒ぶ風の音
ちえと藤原はちゃぶ台の前に腰をかけていた

藤原
ちえ
ここもだいぶ変わりましたね
そうね。日露戦争が終わってからワシたちの生活は急に忙しくなっ
てからに

藤原
ちえ
おばやん、日露戦争なんてもう三十年以上前や
そうかしら、ワシには昨日のように感じるよ
藤原
幸生に何か変化はありますか？

ちえ
藤原
：
いや、わかることはいんですよ、わかることで

康二が戸を開けて入ってくる

康二
いやあおばやん調子はどうで

ちえ おかげさまで、ほんとお騒がせしました

康二 急に毒殺だの幸生が乱心など言うから寝てもたってもいられず

ちえ 大丈夫よ。ワシもな急なことで気が動転していたの。ほれこれじゃ。

虫が入っていたのを毒物に見えたんじゃ

康二 ほんまか？幸生にゃ悪いがあんたの命の方が大切なんよ？この村はあんたのおかげで今の生活があるってもんや

ちえ そんなこと言うて褒めてもなんも出んよ？あんたが村長になったんのも自分の実力じゃ

康二 そう言われると照れるわい

ちえ お茶、飲むかい？

康二 いやワシはちよつと藤原さんに用があるだけなんで

藤原 :

康二 藤原さん、聞いてます？

藤原 え？

康二 これを村の集からや

藤原 (封筒)こんなに、いただけませんよ

康二 藤原さん、もうすぐ元気な男のが生まれるじゃないですの

藤原 :

康二 ささ、これは早く懐にしまつて

ちえ もうそんなかい。いつ生まれるんだい？

藤原 予定では四月に

ちえ　　そうかい、そんなときはうちに来ておくれよ。赤ちゃんの名前みんな
で考えよう

藤原　　ええ、ありがとうございます

康二　　じゃあワシはここで、次会った時化けて出てこんように。おばやん
幸生と鉢合わせする

幸生　　あっ――

康二　　幸生こんばんは

幸生　　：
（耳元）足元はいつも脆い。夜道を歩くときは気をつけないと。藤原
さん少し散歩でも

康二は戸を開けて出ていく

藤原　　幸生。こんばんは

幸生　　どうも

ちえ　　あんたせっかく藤原さんきてるのにそんな言い方はないでしょう

藤原　　いいですよ。私は慣れてますから。な？俺と幸生の中じゃけん

幸生　　：おばやん、ワシ少し出るから

藤原　　出るってこんな夜更けに何をしにいくんや

幸生 関係ないことです

藤原 教えてくれたってええやろ

幸生 狩りに

藤原 どうしてそんな。食うには困っておらんやろ

幸生 肺病は金が食うもんで

藤原 ならワシも行こう、夜道は危険じゃ

幸生 結構です、ワシは一人で狩りをしたいんじゃ

藤原 幸生、すぐ戻るけん、少し話をしよう

藤原は戸を開けて出ていく

ちえ あんたそろそろやめてくれんか。すごく恥ずかしいよ

幸生 すまん

ちえ ワシももう時期長くない、これのことは大っぴらにはせんがあんた

どうしてこんな

幸生 おばやん、これは漢方や、おばやん病氣治らないって言うから

ちえ そう、私のためね

蓮子が突然入ってくる

蓮子 おばやん。道子が熱出して――

幸生

：

蓮子

幸生ちゃん　：　こんばんは

幸生

(ビンタ)

蓮子

痛いじゃない

幸生

：

蓮子

今度はダンマリ。いい加減にしてよ

幸生

あんたは勝手じゃ。勝手すぎる

蓮子

(ビンタ)お返しよ

幸生

(襲い掛かる)

ちえ

(制止する)幸生。やめんさい

幸生

蓮子、ええか次にうちの敷居またいだらそいつでズドンや。覚えて

おき

幸生は急いで戸をあけて出ていく

蓮子

： 私嫌われちゃったかな

ちえ

幸生は昔からあんなんじゃ

蓮子

うん

ちえ

ほら、少し座りな

蓮子

え？話してもおばやんにはわからないわ

ちえ

そうかしら。女の勘よ

蓮子

：

ちえはかんかんからビスケットを一枚取り蓮子へ渡す
急須から暖かな緑の茶柱が流れ落ちていく

蓮子

ビスケットじゃない。懐かしい

ちえ

どうだい。落ち着いたか

蓮子

おばやん、ありがとう

ちえ

あんたここを出ていくなんて馬鹿な真似やめなよ

蓮子

何さ急に

ちえ

知っているんだからね、よく話しておったよ幸生があんたと東京へ
旅行へ行くって

蓮子

そう、幸生ちゃんが

ちえ

ワシはなあの子が幸せならそれでええ。寂しいって言うのは案外な
ってから気づくものよ

蓮子

そう

ちえ

わしがまだ若い頃にはな日露戦争があった、英雄気取りが死に行
く虚しい戦いじゃ

蓮子

日露日露ってこれだから年寄り。私その話嫌い

ちえ

ええから聞きんさい

蓮子

うちのとうちゃんロシアの捕虜になって死んだ。日露戦争なんて誰

がやって得した。お国さんじゃない。国のため国のためって
結局残されたもんは何もない

ちえ
蓮子
ワシの旦那もな、その日露戦争で戦死したんやじゃあなんて
じゃあなんで

ちえ
蓮子
最初はあの人の事忘れられんかった。毎日泣いた、でもな時間って
いうのは私を私じゃなくさせるのよ

蓮子
ちえ
私には関係ないわ
あんたはまだ若い。ここでならいくらだってやり直せるやろ

藤原が入ってくる

藤原
幸生は

：

藤原
蓮子さん。あんたこんなとこいたらまた慎一くん

蓮子
今日は帰るわ。おばやん、明日道子と一緒にここへ来ます。何かあ
ったらそのときはよろしく

ちえ
あんたは強い子じゃ

蓮子は戸を開けて去る

ちえ
どうでした

藤原 お国は村を取り締まるまでそう早くないかもな

ちえ そうですか

藤原 ですが、お国が考える以上にこの村の風習には欠陥がある。私はこ

の村の閉鎖的考えを根本から変えていきたいと思うんです

ちえ 少しお茶飲みますか？

藤原 いえお構いなく

ちえ そうですか

藤原 おばやん、我々警察にも限界っていうものがある。確かに風土やそ

の村特有の価値観は残すべきですが、第一に考え方一つに凝り固まれば人は墮落をするか狭い視野しか見れなくなってしまう。現に幸生に対する誹謗は度を越した。そこで私は一つおばやんに提案があるのです

ちえ 提案ですか？

藤原 幸生を私に預けてもらえないでしょうか？

ちえ ……

藤原 彼もこの村を一度出たのびのびと自由を謳歌するべきなんです

ちえ ですが彼はまだ子供。あなただって来年子供が生まれるのに

藤原 女房には言っておりません。幸生は尋常小学校の頃から成績優秀で物

覚えもよかったです。東京出たらきつといいところまではいけるでしょう。おばやん、幸生のためだと思ってどうやろ

ちえ ……

藤原 時間が無いんだ
ちえ 少し考えさせてくれないかい

ちえは奥の戸を開けると幸生が立っている

幸生 ……ただいま

ちえ あんたこんなに背が伸びたんだね

幸生 ……

ちえは戸の奥へ去る

藤原 幸生、ちと話をしよう

幸生 忘れ物をとりにきただけですから

藤原 (酒をとって)白菊か。いい酒じゃないか。どうやここにお猪口もある

幸生 (探し物をしている)

藤原 ほれ。お前ももう大人。飲めんと始まるものも始まらん

幸生 (チラシ)

藤原 幸生。一回座って話そう

幸生 話すことなんてないですから

藤原 いいから

幸生

：

二人はちゃぶ台の前に座る
静かな空気が流れ。あたりは夜の宵へと変化した
ふと窓の隙間から差し込む朧月が彼らの背中を薄く照らし出す

藤原

最近はどうだ

幸生

：

藤原

女、いないのか？

幸生

おりません

藤原

：

幸生

藤原さん。もうよしてください。僕に構うのは

藤原

(お酒を持って)君が心配なんだ

幸生

(お猪口を手に取り飲む)

藤原

うまいか？

幸生

：

藤原

そりゃそうや。岡山の自然が産んだ。大地の味や。美味いに決まっ

藤原

ておる

幸生

：

藤原

働く決心はついたんだね？

幸生

え？いやまだ

藤原 この間の話、どうかな、うちも女房のお産が落ちつけば一人分くら

いだったらお前が大人になるまで面倒見てやれる

幸生 それを言うためにわざわざ。ご苦労様です

藤原 お前はまだ若いんや。東京出て勉強すればええ

幸生 わしは肺結核ですけん。向こう行っても嫌われる

藤原 そんなことはないやろ

幸生 どうしてそこまでわしに関わろうとするんですか？金ですか？わ

しはあなたと赤の他人。関わったって何も得することないです

藤原 それは違う

幸生 違わないでしょう

藤原 なあ、私が小さかった頃よく君の父親に叱られたよ。君のお父さん

は村でも有名な染め師だったから私の家によく来てね。面倒をよく

見てくれた。私はそれが嫌だった。でもね、私がかやらかすたび

に頭を下げては泣いてくれた。だからさ、私も君の保護者としてそ

ばに居させてくれないか

幸生 余計なお節介です

藤原 そうだ。余計なお節介だ

幸生 (俯いている)

藤原 だから私は君を見捨てない

幸生 :

藤原 幸生、夢とかあるだろう

幸生

：

藤原

ほれ、小さい頃よく聞かせてくれたじゃないか。中国放浪記だっけ？

お前には話を作る才能がある。小説家とかどうや

幸生

：

藤原

子供は好きじゃないか

幸生

嫌いです

藤原

うそこけ。村の子供達が教えてくれるで。幸生兄ちゃんの小説には夢があるって

幸生

：

藤原

勇気がないならわしが応募してもええ。名前どうしようか … 「一文字菊之助」

幸生

：

藤原

大酒呑童子公代

幸生

：

藤原

正門將軍由紀二郎

幸生

「洒落雪三郎」の方がいいけん

藤原

面白い名前やな。自作か。由来は …

幸生

もう遅いですけん

藤原

何をひよっとる。なりたいならなればいい。そんな難しいことか？

幸生

藤原さんは何もわかっておらん

藤原

名前じゃないのか？

幸生 名前はどうでもええ！才能は生まれつきの天性。そない天性わしと

は無縁。それにわしはもう若くない

藤原 才能がなんじゃ。年齢がなんじゃ。お前はやる前から諦める。いい

か幸生。お前は凡人や。でも努力の鬼や

幸生 でも

藤原 でもじゃない

幸生 (再び俯く) …

藤原 幸生お前は一人じゃない。わしがここにおる

ちえが戸を開けて入ってくる

藤原 やれるな？

幸生 (小さく疼く)

藤原去る

緊張と汗と重苦しさがどんよりと渦巻く

突然電球の球が激しく光り、事切れる

第八章

「一九三八年 四月某日」

劇場の至る所から聞こえてくる経の声

蠟燭に火が一つずつ灯されていく

舞台端に男があぐらをかいて座っている

舞台の袖では面をつけた男が立っている

観客席にも面をつけた女が座っていた

他にも面をつけたもの達が奇々怪界に照らされてそこにいる

康二が戸から現れゆっくり時計の鐘が鳴る

能面二 今日もいたのよ。明美さんの家近くをうろうろ。あの子藤原さんが

釘を刺してもまだ出歩いているんでしょ？あの陰湿な笑い。思い出すだけで気味が悪い

能面三 あいつの家系はロウガイスジじゃ。いつか問題を起こす。わしは前から言うておったやろ

能面一 そりゃ、酷なもんと言う他ないやろ。あの子だって好きでなったんじゃないんだから

能面四 銃隠し持ってたやないの。昨日だって殺すって

能面一 そりゃ、あいつは獵を山でしておる。わしもアイツが狩った猪の鍋をもらったわ。少し生臭かったがうまかったで。それも一つの才能や(そのまま会話を続ける)

幸生が面をつけてこの場に入ってくる

幸生 (座る)今どういふ状況ですか？

能面五 殺すか生かすか。君はどっちだと思ふ

能面四 (制止する)あんた

能面五 ええやろ別に

康二 どうした。そんなに震えて。具合でも悪いんか

幸生 いえ、風邪が長引いてまして。ですのお構いなく

能面一 (構わず)いいんか？国の奴らがまた規制だなんのってまた指導が入ったらそれこそこの村は終わり

能面二 何を今更。始まってすらいないじゃない

幸生 …

能面三 (幸生)おい。あんた。あんたや

幸生 はい？

能面三 どのもんや

幸生 …

能面三 見ない顔だが、どこから来た？

幸生 …

能面三 (面を取ろうと)

能面五 (手を掴み)じーさん。詮索は酷ってもんや。なんのための面か忘れたか？

能面三 …

能面五 すまんの

幸生 …

能面二 (声を張り上げ)だから！あいつ昨日もうち来て逸物出して。気持ちが悪いのよ。病気うつったら責任取れんの？アンタの娘だって被害に遭ってんじゃないさ

能面一 …

能面二 明らかな殺意が奴にはあった

能面一 …

能面二 何さ。急に黙って。あんたそれでも男？

康二 (深呼吸)

みんな …

康二 一九三八年六月末に川で男性の溺死体が一人打ち上げられる。外傷はなし。大量の頓服薬を摂取。青年は精神的疾患を患い服毒自殺。

事件性はなしと断定し警察の捜査も打ち切り

みんな (ざわつく)

能面一 そりゃわしかてあいつの行動には目を見張るものがあると思ってお

る。じゃがちとやりすぎじゃないか

能面二 意義なし

能面三 意義なし

能面四 意義なし

能面五 お前まで。考えろ、子供殺しじゃ、大人を葬んのはわけが違う

能面四 もう我慢の限界。毎晩毎晩家に来られて本当うんざり。どうかして

いるのはあんた。あの子に殺されても口は出せないよ

能面五 どうして殺す必要がある。あの子は村の宝やないの。ただでさえ老

人ばっか増えて行くのに、支那変で若者がどれだけ徴兵された。こ

れ以上村の宝を手放す事、わしは認めん

康二 お前さんが動揺するのもわかる。だが、これは村の掟に従って行動

に移すことを忘れないでほしい

能面五

能面四 あんた（お腹を触り）

能面五 じゃが

能面四 （袖を掴み）私たちがもう一度一から頑張るんでしょ？

能面五

みんな （能面一を見る）

能面一 掟とはなんじゃ

康二 掟は秩序を守るための道德じゃ

能面一 その道德を守るためには何をしてもいいと

康二 ああそうじゃ。十五年前。東京から来たやつ。村の秩序を荒らした

せいで何人もの女子が孕んでしまった。汚い血や

能面一 じゃが今回は村のもんや

康二 あいつはもう村のもんじゃなか

能面一 わしは反対じゃ。あいつはまだ殺しておらん

能面三 あんたもわからずやだな。幸生はもう時期人を殺す計画があるんや
って言うておるやろ

能面一 そんな憶測や

能面四 藤原さんあの子から殺人の計画を聞いていたって言った。駐在さん
の一家を殺して村を襲う。その後駆けつけた警官を皆殺しにする
って

能面一 そないこと自分で言うたのか？そりやおかしな話やな

能面四 あの子は殺人を計画する子。病気持ちなのよ。ここが

能面一 まずな、警官殺しをするなんて無茶なことはあの子だって考えんや
ろ。それにだ、あの子には姉がおる。姉を悲しませることなんかせ
んだろ

能面四 あのと東京野郎のように第二のかよを殺してしまうかもしれない

能面一 あれは事故や

能面四 原因はあいつ。間接的であれね

能面二 そんな強情になっても始まらないやろ。わしらはみんなが殺害に対
して賛成をしておる。慎一くんも同意見やそうや

能面一
：

能面二 こう考えればええ。面をつけた妖があいつを誑かし殺した。これで解決や

能面一
：

能面三 アンタはどう思う

幸生
：

能面三 (幸生)おい。あんた。あんたや

幸生
：

能面三 なんや、若いのにずっと黙って意見の一つや二つ出したらどうや？

幸生 (面を取る) ；逃げませんから。少し話をしませんか？

〔沈黙〕

康二 幸生お前ならどう思う

能面一 幸生答えんでええ

幸生 わしなら村の秩序のために殺します

能面二 なら死んでくれ

幸生 あなたも死んでくれますか？

能面二 (立ち上がる)

康二 (制止する)幸生。お前は一線を超えた。ほれ足下はいつも脆い

幸生
：

能面一 おばやんのところへ帰れ。あの人が生きてるうちはわしらも手を出

さん。だろ？これも掟や

幸生 (土下座)みなさん。この度はお騒がせしてしまい申し訳ございませ
んでした

急ぎ足で戸へ入る幸生

能面二 (鼻を押さえて)本当敵わんわ。あいつの匂い。まるで獣よ。獣

「モノが壊れる破壊音」

みんな …

能面五 (立ち上がる)

康二 (制止する)

みんな …

「二発の銃声が轟く」

破壊音は静まり返り

埃が少し舞いながら静寂が広がっている

戸の奥をゆっくり覗く能面四

能面四 (悲鳴)

康二 (彼女の横に立つ) やられた

能面二 (戸から汚い塊を出す) あいつはほんまのの外道や

能面四 (鼻を引き攣らせて) なにこれ

能面一 わしのコロや

みんな

康二 決まりやな

能面二 あんたが早く決めんかったからあいつに先を越されたやないの

能面一 なんや、わしが決めんかったのが悪いんか？

能面二 そうや

能面一 抜かすのも大概にせえよ。幸生を殺して平穩を得ようとしたのはあ

んた達やからな。そのバチが当たったんや

能面二 それはあんたもでしょ？

能面一 わしは反対した。ずっとな

能面二 それはどうか

康二 言い争っても始まんやろ。どうするかが問題や

能面三 いますぐ殺すか？

能面二 それはまずいやろ。あいつは藤原さんに言うかも知れん

能面三 じゃあどうするのさ

能面五 あいつの動向に注意をするしかないやろ

みんな

：

康二

おばやんに恩義がある以上わしらは手をだせん。今は耐えるときや。時期が来た時あいつを殺す。ええな

みんな

：

重苦しい空気が漂い世界は再び混沌へと落ちていく

あの煉獄の中にある暗く寂しい幸生の中へ

あの過去と未来と現在が混濁し記憶の中へ落ちていく

第九章

「一九三八年 五月二十一日」

蓄音器から流れるどこかの国の音楽

ちゃぶ台の前に座る祖母ちえの前に冷たいお茶が一杯

彼女の背中から漂う哀愁はどこか寂しい様相を漂わせる

ちえの前に一着の学生服が置いてある

戸の前に立っている藤代

電球がわずかについて消えて繰り返す

「時計の音…ボーン・ボーン・ボーン」

藤代 だめ、どこにもおらん

ちえ そうですか

藤代 そうですかってゆきやんどこにもないんだよ？

ちえ 幸生はもうすぐ帰ります、どこかで遊んでるんでしよう

藤代 おばやん、ゆきやんね長くないの。あの身体じゃ遠くへは行けんはずなの

ちえ 幸生が？あの子は立派にすくすくと育ってくれましたよ

藤代 おばやん、ふぎけんといて

ちえ それよりも、藤ちゃん折角村に帰ってきたんだからお茶でも

藤代 :

ちえ (囲炉裏を触りながら) いいかい、あんたが思っているよりことは重

大じゃないんだよ。きつとね。幸生にゃ甘やかしすぎたワシがおる、
あの子の両親死んでワシがなんとか立派な総領に仕立て上げないと
って思ってたきつい事を言ったけど、あの子はそんなしがらみが嫌だ
ったんだらうね

:

ちえ 藤ちゃん、あんたの優しさだけで充分や

藤代 いただく

ちえは奥の戸へ入っていく

藤代はマッチに火をつけようとするが中々つかない
電球の光が途端に消える

ちえ あら停電かしら、藤ちゃん蠟燭取ってもらえる？

急いでタバコの火を蠟燭へ灯す藤代

「扉を大きく開ける音」

康二 おばやん、おばやんはおるか

ちえ 康二さん今日は何ようで

康二 いえね、夜の見回りを。最近何かと物騒なことが起こっておると聞

いてな。何か変わったことはないか

ちえ 変わったこと――そういえば最近うちの畑に鹿か猪がよく作物を食

散らかすのよ、幸生が追ひ払ってくれんのだがいっぱい入ってきて

ねどうにかならんかしら

康二 そうですか。網か何かをせんといけませんね …… 藤代帰ってたんか

藤代 康二さん。こんばんは

康二 嫁ぎ先から帰ってきて申し訳ないんじゃが何か変わったことはなか

ったか？

：

康二 例えば幸生がおかしいとか

藤代 …… いえ、ここにはまだきたばかりで

康二 そうか。何かあったらすぐ知らせてくれ、こんな日じゃものけが

現れてもおかしくない。

ちえ わざわざありがとうございます。こんな時間やないですよ、夜道は

暗いのでお気をつけて

康二 あの、幸生は？

ちえ え？

沈黙

康二 あの子が心配でね少し話がしたいんだよ。今どこに？

藤代 えっとゆきやんはその

ちえ 幸生なら奥でぐっすり

康二 ほんまか。では少し上がらせてもらおうよ

ちえ 構いません

藤代 おばやん

康二 幸生！幸生！

ちえ あの構いませんがちと問題が

康二 なんじゃ問題とは

ちえ いえ、その大変申し上げにくいのですがあの子は今肺病とその別の

病気を併発しまして

康二 なんやマスクしてりゃ大丈夫やろ

ちえ マスクどうこうの問題じゃないんですよ。その梅毒を少々

康二 梅毒？あいつまた夜這いをしておるんか

ちえ ；今は苦しんでいるのでどうか何卒ご配慮を

康二 じゃがこれも仕事なんだ。わかってくれるだろう

ちえ そうですか

康二は扉を開ける

幸生 康二さんこんばんは。こんな夜更けにどうしましたか？

康二 お前梅毒って本当か

幸生 梅毒？何を寝ぼけておるんですか、ワシはこんなにピンピンして
おるやろ

康二 そうじゃな。すまん忘れてくれ

幸生 康二さん、もうすぐ新しい夜明けですね。気持ちがいいでしょう？

康二 ああ、せいせいするくらいにな

幸生 康二さんもあまりおいたはしないでくださいね。穴兄弟になるなん

て嫌ですから

康二 … それでは失礼します

ちえ 夜も遅いですし少しそこまで送ります

康二とちえは戸の外へ出ていく

藤代と幸生はお互いを見つめ合う

藤代 ゆきやん

幸生 …

藤代 ゆきやん聞いて

幸生 (逃げようと)今日はもう遅い。帰れ

藤代 もう逃さないから

幸生
でどうする

藤代
どうもせん

幸生
なら帰れよ。お前がいなくてもワシは生きていける

藤代
いい加減にせえよ。おばやん放っておいてどこかへ行って。みんな

心配しておるんやあんたの事。ええか？あんたはもっと大人の責任
を持つべきだ。なに？痛い。ちよっどうしたのゆきやん、そない泣

かないで。どうしたの　　：　　ゆきやんちよっ待って

幸生
(ヒ首を落とす)はっ

藤代
!?

幸生
なんでもなか。見るな

藤代
(奪う)ばか！何よこれ

幸生
動物のあれを着るためのあれじゃ

藤代
ヒ首なんて聞いたことがないわ

幸生
じゃから返せ

藤代
あんた死ぬ気じゃないでしようね

幸生
返せ

藤代
だめ

幸生
返せよ！

藤代
ゆきやん。もうやめようや

幸生
(奪い取り)お前には関係ないけん

藤代
ゆきやん、もうやめてくれ

幸生　：　藤代一つ聞いていいか

藤代　何よ

幸生　東京へ行こう

藤代　いや。絶対に嫌！

幸生　そうか

藤代　：　ばか

「藤代は勢いよく戸を開けて出ていく」

入れ替わりに入ってくるちえ

幸生は俯いている

ちえ　幸生

幸生　：

ちえ　幸生ってば、少し話をしましうや

幸生　話すことなんてないけん、ワシはもう寝る

ちえ　あんたワシらは家族やろ。ほれ座りな

幸生　わかった

ちえ　ワシはあんたにこれまで好き勝手させてきた。じゃがもう何も言わ

ない

幸生　え？

ちえ 藤原さんがなお前を連れて東京へ行くって聞かんのや

幸生

：

ちえ

幸生ワシのことはもうええ、お前一人で生きていけ

幸生

：

ちえ

ワシはこの村で細々と生きていく。だけど一人は寂しいからな時々帰ってきてはくれんか？

幸生

おばやんは勝手じゃ

ちえ

：

幸生

なあロウガイスジって言われてどう思う？

ちえ

あんなの村の奴らが言っておることや気にする必要はないけん

幸生

わしは辛い。あなたが思っているよりもずっと

ちえ

あんたの両親は確かに肺結核じゃったがそれでもお前の親父さんは日露戦争を立派に生きて帰ってきた英雄じゃった。だから誇ってもバチは当たらない

幸生

本当にしらばっくれるんだな

ちえ

そんなひどい事を言わんでくれや。わしはなお前の幸せを願っておる。何が不満なんじゃ

幸生

もういい加減にしてくれよ。いつまで親の振る舞いをする。うんざりなんだよ。血も繋がっていないいくせに

ちえ

(絶句)

幸生

ずっと知っておったわ。あんたがわしを利用するためにこの家で隔

離させておったことも。わしの財産得るために皆に悪い噂を流して
いたのも。全部。全部や

ちえ (ハンカチを手に) あんたを大事にしてきたのにひどいわ

幸生 (手を掴み) もう演技はするな。哀れだ

ちえ もう声すら出ないよ私は

幸生 ワシはあんたが嫌いじゃ。あんたのそう言った偽善に満ちた物全部
全部じゃ

ちえ 幸生。ワシはもう寝るけん

幸生 知らん

ちえ 一ついいかい？ワシは例えあんた土地がなくなっても私の
子供には変わりないんだからね … おやすみ

「戸の奥へはけていく音」

静けさが辺りを包み込み幸生はぼつねんと立ち尽くす

足元には学生服が置いてあり、ゆっくりとそれを着込む

幸生 鉄砲担いだ兵隊さん。足並み揃えて歩いてる。とつとことつとこ歩

いてる。兵隊さんは綺麗だな。兵隊さんは大好きだ

第十章

「二九三八年 五月二十一日 朧月夜」

記憶が反芻し煉獄の最北端に位置する暗雲渦巻く幸生の部屋

学生服姿の幸生が正座をして座っている

手には遺書を持ち、豆電球の明かりが優しく照らし出す

音のない無音の世界で幸生はそっと遺書を開く

幸生

自分がこの度死する望み一筆書きおきます。ああ思えば小学生時代は真細めな児童として先生に可愛がられた此の私が現在の如き運命になろうとは、私自身夢だに思わなかったことである。私の人生を百八十度変えた出来事は十九の時。幼き頃より助膜炎によって青春の半分を奪われた私であったが、この時に味わった病気は真の肺結核と言えるであろう。痰はどんどん出る。血線は混じる。床につきながらとても再起はできぬかもしれんと考えた。そんな病弱な私をよそ目に藤代や蓮子は見捨てていった。

幸生はゲートルを履き猟銃に弾を込め始める幸生

幸生

特に蓮子は私があの子のせいで死のうと思つた原因がある。あの女はわしに気があるからわしは何度も関係を持ったのだ。病気になる以前は親しく親族が少ないから助け合つていこうと言つていたが病気がひどくなつてからは私を遠ざける。あれだけ深くしていた女でさえ病氣になつたと言つたら心変わりする。私は人の冷たさをつくづく味わつた。私は何度か前のように関係を戻すことはできないかと尋ねたが、相手にしてくれず睨みつけながら私を見下し、上鼻払いをして散々悪口を言つたのだ。私は蓮子に立ち向かつたが、お前等如き肺病患者に殺されるものがおらんと言つて帰つていった。私の腹は煮え返り決断をした。必ずあいつらに復讐してやると

幸生は鉢巻を被り懐中電灯を二本つけ

刀と匕首を常備して、ナショナルランプを首から下げる

幸生

藤代。お前は どうして捨てた。あの女はわしがこんなにも愛しておつたのにどこの骨ともわからんやつに嫁いでいきおつた。私がこの書き物を長々と残すのは自分が精神異常者ではなく、前もつて覚悟の死であることを世の人に見てもらいたいからである。不治と思える病氣を持っているものであるが近隣の礼酷圧迫に対し復讐のために死するのである

永遠にも感じられる長い時間

どこからか聞こえてくる女の声

優しく包む女の声は、聖母のように幸生を包み込み

幸生は胎児のように安らかな母胎の中で目を覚ます

戸に映る岡本ちえの寝姿。幸生はちえの前に立ち尽くす

幸生

おばやん、すまんの。あんたを一人にすることはどうしてもできんのじゃ

手元にあった鉈を取りちえに向けて振り落とす

何度も何度も何度も何度も

どこからともなく聞こえてくる少女の手毬唄

今にも消えそうな手毬唄は望郷の念を彷彿させる

「静かな時の刻む零の刻に聞こえる時計の音」

戸が倒れ少し辺りを伺う幸生はニヤリと微笑む

まるで人里降りる鬼子のように彼の顔に血が滴っていた

第十一章

〔一九三八年 五月二三日〕

光が灯る劇場に一人の少女が立っている
少女藤代は手毬をつきながら舞台上で遊んでいる
観客席にいる能面をつけた者
光に照らされそこにいる

みんな 『おしろのさん』

おしろのさん

おんしろしろしろ しろきやの

おこまさん さいじよさん

煙草の煙がじょうはっさん

相手にならぬはおこむらさん

ひいやふう みいやよう

いつやむ ななやこ

とんとん叩くは誰さんじゃ

しげさん何しにお出でたら

せきだが代わってかいにきた

おまえのせきはどんなんじや
おこんにむらさきあいびろう
あいびどろ

そんなせきだがあるものか
あるのにないゆてくれなんだ
やあれ腹立ちごうわきや
わしが十五になつたなら

西と東に倉立てて

倉のまわりに松植えて

松の小枝に鈴つけて

鈴がしゃんしゃん鳴るときにや

鳴るときにや

父さん母さん嬉しかろ

爺さん婆さん悲しかろ

悲しかろ

手毬を持った能面達は至る方向で歌う
ずれたもの、

落としたものは幸生の象徴となり

口々に彼のプロフィールを語り出す

能面達

(口々に) 私は大正五年に生まれました。遠くに見える阿波村や鳥達ざわめく山々に囲まれて私の青春はここにありました。ふと聞こえる命の消える音。私たちは生き物を殺し生き物と共存し、生き物を紡いでいかなければなりません。これが真理であり、これが人間の摂理です。ですが人を殺すことは悪です。まかり通ってはいけません。もし人を殺す可能性があるのなら今ここで駆逐しないと、私たちに未来はもうありません

少しずつ消えていく光の灯火、全ては可能性であり

もしこの光が残っていたならば違う可能性もあったのかもしれない
電球が激しく光と闇を行き来して

能面達は手毬をつきながら舞上を移動する

口々に同じ言葉を連呼する能面達

発砲音。うっすら見える幸生の顔

能面一

(倒れる)

〔沈黙〕

能面達 (再びおしろのさんくを最初から)私は大正五年に生まれました――

また発砲音が至る所から鳴り響く

次々と倒されていく能面達

一人死ぬたびに舞台上から音が消え

また一人撃たれるごとに、舞台上から気配が段々と消えていく

だがそれをよそに、ただ盲信的に幸生の記憶を繰り返す能面

能面二が舞台上で立ち尽くし話しながら立ち止まる

消えかけた電球に手を伸ばそうとして、幸生は能面二を押し倒す

能面二 (悲鳴)

幸生 道子！！こいつがあかんのよな(股へ銃口をむけ)こいつが墮落の原

因や

能面二 金か？金ならなんとかする。じゃから早まったことはするな

幸生は発砲。倒れる能面二

あたりに静けさが漂い、幸生は能面二を舞台の端へ引きずっていく

〔物陰から倒れる音〕

藤代と慎一は物置から飛び出てくる

藤代 どうしよう。どうしよう。慎一さん、どうしよう

慎一 藤ちゃん

藤代 みんな死んだ。健ちゃんも諭吉おじちゃんもみんな死んでしまった
った

慎一 落ち着け(懐から)ほれ少し飲み

藤代 いらん、飲めん

慎一 (飲ませる)ええから

藤代 (咽せる)慎一さん、どうしたらよかった

慎一 それはワシにもわからん

「扉を急激に叩く音」

二人 !?

康二 わしや、康二や開けとくれ

藤代 (開けようと)康二さん。早く

慎一 (制止する)まち、あんた本当に康二さんか?

康二 何を抜かしておる、この声を聞いてもわからんのか

藤代 慎一さん

慎一 … わかった

「戸を開ける音」

康二 (扉の中へ) あいつめ、ついにやりおった。どうしたそんなボツトして。しつかりせい

慎一 えっ。あつすまん

藤代 康二さん。みんなは？みんな無事なの

康二 ……

藤代 健ちゃんは？里子ちゃんも逸れちゃったんだよ。みんな無事に生きてるよね？

康二 …… ああ

藤代 よかった。きっと駐在さんのところへ行っているわよね。うん。そうだよ

康二 (手を握る) ああ

藤代 (嗚咽) みんな無事だよ。よかった。よかった

静かに響く藤代の鳴き声

〔遠くから聞こえてくる銃声の音〕

三人は咄嗟に物陰へと隠れる

〔舞台客席から聞こえる悲鳴の声〕

幸生

「船頭小唄」

俺は河原の枯れすすき

同じお前も枯れすすき

どうせ二人はこの世では

花の咲かない枯れすすき

戸にうつる男の影

幸生

もし。もし？誰かおられますか。向こうで人が暴れてまして入れてい

ただけませんか？

慎一

藤ちゃん。だめや

藤代

でも、ゆきやん者ないかも

慎一

(しっ！)

幸生

入れてくれんとわし汚しておるんです。肩を撃たれて入れてくれま

せんか？

「戸をガタガタする音」

扉には栓抜きがされ中々入ることができない

幸生

藤代！お前が出てこんど、庇ったこいつ等死んでまうで？あと一秒

待ってやる。はよ出てこいよ5・4・3・2・1

藤代 (出ようとする)

慎一 藤代ちゃん。だめや罨や。そうに決まっておる

藤代 でも、寺さんが死んじゃう

康二 こっちや。はよこっちへ

三人は物陰へとゆっくり隠れる

幸生 (戸を思いっきり開ける)

幸生は銃を構えナショナルランプで当たりを伺うが
そこには誰もいない、物影を探すが誰もいない

幸生 (戸を閉めて)藤代!どこじゃ!藤代

段々と遠ざかっていく幸生の声

三人は隠れている場所から出て暖を組む

慎一 わし、藤原さんところに行くてくる

康二 藤原さんコンとうことはそういうことやろ

慎一 あの人は腰抜けだが、それでもワシらにはもうそれしかない

康二 ならこの子も連れて行け

慎一 だめや

康二 馬鹿野郎。お前一人で助かってどうする。ワシらはもう毫碌して
るから死んでも構わんがこの子はまだ結婚したばっかこれからがあ
る

慎一 ええか？ワシらが相手しているのは野良の獣じゃない。鬼や仏さん
が間違えて使わした鬼の類や

〔銃声の音〕

戸の隙間から出ている銃口の先、慎一は音もなく倒れる

藤代 (悲鳴)

[Paganini Caprice No.24 For Violin]

幸生 見いつけた

康二 (急いで逃げようとする)

幸生 (地獄のような雄叫び)康二！

倒れる康二、それでも逃げようとする康二に近づこうとする幸生

慎一は起き上がって、手に持っていた木の板をぶつけ倒れる幸生

藤代 慎一さん。早く藤原さんを！早く！

慎一は戸を開けて急いで出ていく

幸生 痛いのお。痛いのお。慎一、慎一はどこじゃ

康二 お前はもう岡本幸生じゃない。化け物や祟りを喰らったものけや

幸生 (発泡)死ねや

康二 (吐血)

康二は倒れる

藤代 (お漏らし) ゆきやん

幸生 藤代、ようやく見つけた

藤代 どうして、ねえどうしてみんなを殺した

幸生 理由はあるか。殺した方がみんなのためじゃから

藤代 みんなって誰よ

幸生 (藤代の肩を蹴る)こいつがいけんのやこいつがあるから男とか女と

かいざこざが起こる

藤代
：

幸生 わしは啄木なんかに負けとうなかつた

藤代 なあもうこんなことやめようよ。ね？

幸生 (突然笑い出す) お前はバカか？これは大事な儀礼や。お前らは生きていちゃいけない日本の恥や。安心せえ。わしが冥土へお前を送つてやるけん

「未来で聞こえたはずの寂しい汽車の音」

幸生 聞こえる

藤代 え？

幸生 聞こえんか。東京行きの鉄道列車

藤代 もうやめて

幸生 寂しいのお。こんなにお月さんは煌々と輝いているのにワシの心は満たされない

藤代 わしには聞こえん

幸生 聞こえるんや。あの時、聞こえた祝いの歌が毎日毎日聞こえるんや

藤代 わしはどうしたらよかつたけん

幸生 なあ藤代、荒坂峠で約束した事覚えてるやろ？

藤代
：

幸生 東京へ行こう

藤代は勢いを持って幸生へ突進

ふいをつかれた幸生は銃を落とし藤代に奪われる

藤代 (銃を構え)私はいや。絶対に嫌だから

幸生 どうする。お雨一人でワシに復讐を果たすか。お前は死ぬまで俺の怨念に付き纏われるだろう。いいか、お前がその引き金を引いた瞬間、お前は俺と一緒に地獄旅行

藤代 ゆきやん。もう頼むから死んでくれ。わしはあんたを見ていると惨めで仕方ない。わしが最期を看取ってやるけん。お願いだから

藤代は急いでトリガーを引くが弾は出ない

何度も引くが弾は出ない、焦り出す藤代

幸生は急いで藤代を押し倒し猟銃を奪い取る

藤代 (暴れる)

幸生 (弾をこめ)鉄砲担いだ兵隊さん。足並み揃えて歩いてる。とつとこ
とつとこ歩いている。兵隊さんは綺麗だな。兵隊さんは大好きだ

藤代 わしはどうすればよかった。あんたんことを愛していたのに

幸生 (藤代の口の中へ銃の先を入れる) :

藤代 (口の中でモゴモゴする) ゆきやん

潤一 藤代。わしにとってここが世界だったんや。見てみ！世界はこんな

にも小さいんや

沈黙を破るように聞こえてくる優しい歌声
幸生はその声の先を見つめるのであった
戸に映る能面少女の淡い影

少女

『花嫁御寮』

金蘭どんすの帯しめながら
花嫁御寮は なぜ泣くのだろう
文金島田の 髪結いながら
花嫁御寮は なぜ泣くのだ

彼女は幸生を見つめたただそこに立っている

幸生

姉しゃん、明日結婚するんだね

パチンと何か弾ける寂しい発砲音

「ショパンピアノ協奏曲 第1番 ホ短調」

暗転

エピソード

〔一九三八年八月十五日〕

雨がしんしんと降り付け月がほのかに見える宵のこと

惨劇が引き起こされた岡本家にて

そこに彼らはもういない。いるのは蓮子だけ

蓮子は居間の片隅にて窮屈だった足をゆっくり伸ばす

もんぺから滲み出るじっとりした脂汗が甘美な様を醸し出す

端にひっそり座る丸まった背中

机の上にはひとしきりぐちゃぐちゃになった新聞紙

蓮子は手元にあった湯飲みの中へ薬を入れる

ほのかに薫る鼻を劈くような刺激臭

その湯飲みをゆっくり口の中へ流し込む

〔扉が勢いよく開き反響する音〕

ずぶ濡れになった藤原が立ち尽くす

藤原

随分ここも変わったね

蓮子 ええ。あの時みんなでお酒飲んだのが嘘のよう

藤原 (遺骨) 最後までらい家族と一緒にいさせてもいいと思うんだ

蓮子 わざわざ御足労いただき恐縮です

藤原 … おばやんはどこかな

蓮子 (端を見つめる) なんだか寂しいのよ。おばやん生きてたときは死
んじやっえって思った事結構あったけど、いざいなくなるとね

藤原は祭壇の前に腰を落とす

マッチ箱を懐から取り出して線香へ火を灯す。

ふとあたり一面に薄靄のかかった煙が漂い

仏具の奏でる共鳴音がこの陰鬱な空間に静かな安らぎを与える

藤原 ここも随分寂しい村になってしまったよ。君がまだ尋常小学校へ通

っていた時なんかは、若い衆が金刀比羅神社に集まっては祭りだ祝

いだって騒いでいたけれど――懐古主義に囚われちゃ情けないな。

男どもがしっかりしなくては支那事変へ飛んだ仲間に笑われてしま

うよ

蓮子 努くん

藤原 懐かしいな。努だなんて何年振りだろうね

蓮子 茶化さないで。努くん。はっきり言って

藤原 (タバコに火をつけ)もう時期この家を壊すことが決まったよ。組

合の意向を尊重してね

蓮子
そう

藤原
寂しいのか？

蓮子
そうよ。悪い？だって私はここで育ったようなもんだもん――そんな
めで見ないでよ

藤原
ごめん

蓮子
： 寂しくないあんたの方がどうかしているわ

藤原
僕だってこの家には思入れがあるよ。僕は何にもできなかつた

蓮子
：

藤原
でもさ、クヨクヨしても仕方ない。僕らも慣習に囚われず重い腰を
動かさないといけないんだ

蓮子
： 何それ

藤原
(菊の花を添える) 来る途中にね。綺麗だろ？

蓮子
綺麗

手を合わせる藤原

藤原
： 明日検事局は処分を下す

蓮子
：

藤原
あの災厄のあと、村の生き残りから証言をいただいたよ。君も含めてね。皆口々に言うのは彼への軽蔑。村のもんが口を揃えて一言一

句違わずに言うもんだから、検事局は、怨根により村人を三十人殺害したのちに、生まれ持つ犯罪的精神疾患によって自殺。よって公訴権は消滅に帰したるを似て本件は起訴せずと

蓮子 当然ね

藤原 ああ、当然さ

蓮子 私にどうしろと

藤原 僕はこの結果に満足してないとても

蓮子 (タバコを啜え) 何さ今更、聞きやしないわよ。そんな事

藤原 蓮子さん(封筒)これを

蓮子 (百円札の束)こんなにももらえない

藤原 幸生からじゃ。もらってくれ

蓮子 あんたこれ、生き残ったみんなにやってんの。ご苦労な事ね

藤原 :

蓮子 (封筒を懐にしまい)辞めてよ。まるで私が悪人みたい

藤原 あの子は最後の最後まで人間だった

蓮子 (マッチに火がつかない)考えすぎよ。ねえマッチ持っていない?

藤原 :

蓮子 だからマッチを持っていないの?

「雨の振り付ける音が家の中を激しく叩く音色」

蓮子 私は別にいいの。こんな村滅んでザマアミロって感じ、でもねそれよりも気に食わないはあんたよ。変な正義感振り翳して私を出し抜いたつもりだけど、私は生憎馬鹿じゃないの

藤原 すまんかった。慎一くんはあの後致命傷で――助からなかった

蓮子 そ。まあいいんだあんな馬鹿亭主。さっさと死んでさ

藤原 (俯いている)

蓮子 今度は何

藤原 道子ちゃんも

蓮子 !?

藤原 責任があるのは私です

蓮子 そう。だめだったの

「時計の重く響く音…ポーン・ポーン・ポーン」

蓮子 努くん。ねえ顔あげてよ。私は、ここにけじめをつけにきた。それだけよ。あんたが気にすることなんて何にもないわ

藤原 すまんかった

蓮子 (酒を酌み)ほら努くん。失ったもんは帰ってこん。ほら、献杯

蓮子 (お猪口を取り出す)ほらあんたがシャキツとせんと始まらんでしょ?

藤原 (お猪口を見つめている)

蓮子 (お酒を注ぐ)献杯!

カチンとお猪口を当てる蓮子

朧月の光が蓮子と百合絵を優しく照らし出す

蓮子の手元に新聞紙が一つある

蓮子は窓から差し込む朧月から漏れ出る光を受けて

手元の煙草にジツポの火を当てる

蓮子は机に置いてある新聞を取り上げる

蓮子

(新聞紙を片手に持ち)東京、やっぱり騒がしいわ

遠くから微かに聞こえてくる「少女の歌う声..東京節」

夏にしては涼しい風が二人の背中を通り過ぎる

蓮子

東京ってやっぱすごいのか？百合絵ちゃん、修学旅行丸の内でしょ

藤原

:

蓮子

決めた！私東京に行く。百合絵ちゃん！東京。東京よ！私と一緒に
行きましょうよ

藤原

:

蓮子

やめてそんな目で見ないで

藤原

私には子供がいますから

蓮子

冗談よ。冗談。本気にした？東京も今忙しいから。あんたにはここ

がお似合い…憧れるわ(読みながら)若き盟邦ドイツの使節。明日横

浜湾に来日。ほらこれ、ドイツの若き選抜隊、素晴らしきゲルマン民族ヒトラーユーゲント隊よ？知らないの？家でぶらぶらなんかしない。勇猛果敢に日本の同盟国として戦ってくれるドイツの若い男達、荘嚴煌びやかな様式に眠らない街東京駅での群雄割拠な大行進。毎日がどんちゃん騒ぎ。素敵じゃない　：　わかったわ。もう聞かない。あとこれ(封筒)いらぬから。

藤原

それはだめだ

蓮子

いいからもらって。あんたもさそんな見窄らしい格好しないで服買ったら？今時流行らないわよ。制服なんて

藤原

：

蓮子

どうしようもないのよ。悩んでも

藤原

私がつと早くに彼を東京へ連れて行けたら良かったのに

蓮子

あんたがあの子を養子にしようが姉妹が、いずれあの子はここを出て行こうとしていた。あの子に同情するわけではないけどさ、あの子は可哀想な子。家族に縛られながら。奴隷よそれこそ

藤原

だが私が幸生を説得できたなら人は死なんかった

蓮子

もう何さ！悲觀的に考えても何も始まらないの。どんなに辛くても前に進まなくちゃいけないの

藤原

：

蓮子

私は東京へ行く。絶対に東京へ行く

藤原

蓮子ちゃん。東京に行っても何も無いだろ

蓮子

(靴を履きながら)ここよりはあるわよ

藤原

:

蓮子

さ、あなたと私も今日で終わり。お互い強く生きましょう(戸に手をかけ)ねえ!もう時期長い夜が始まるわ。長い長いね

蓮子は振りむかず暗い夜道をひたすら歩いていく

一人ぼつねんと座る百藤原は幸生の遺骨の前に座る

被っていた警察帽子をそこに置き

凄惨な事件のあった岡本家を後にする

誰もいない蓄音器から鉄針が落ちる

美しく流れる蓄音機の音色

ふと窓から流れる朧月の木漏れ日は少年時代の美しさを彷彿させて

香木の薫がかすかに匂うこの場所に静寂だけが世界を包み込む

ふと少女が囁く声が劇場に響き渡る

終わり